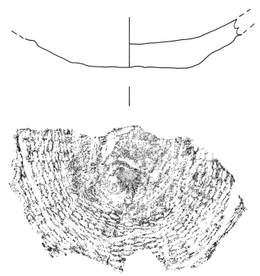
四條畷市文化財調査報告　第 59 集

四條畷市文化財調査年報

第 7 号

森山遺跡



令和２（２０２０)年３月

四條畷市教育委員会

四條畷市文化財調査年報　第７号

二〇二〇・三

四條畷市教育委員会

巻 頭 写 真 図 版 1

1．森山遺跡　遠景（北から・平成10年）

2．森山遺跡　遠景（南西から・平成10年）

巻 頭 写 真 図 版 2

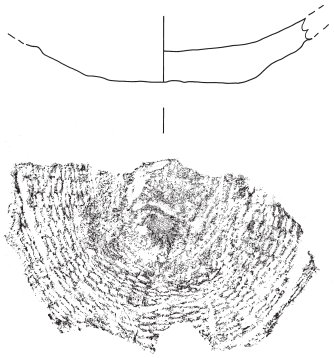
1．MY1994－1　第２遺構面完掘全景（西から）

2．MY1993－1　籠目土器

四 條 畷 市 文 化 財 調 査 年 報

第　7　号

森山遺跡



令和２（２０２０)年３月

四條畷市教育委員会

例　　言

1．　本書は、四條畷市文化財調査年報の第７号であり、四條畷市文化財調査報告の第 59 集である。本書には、平成３(1991)年４月に店舗付き住宅建設に伴い実施した埋蔵文化財試掘調査と（ＭＹ1991-1)、平成４（1992）年 12 月から平成５（1993）年２月と同年 10 月に田原２号汚水幹線築造工事に伴い（ＭＹ1992-1・ＭＹ1993-1)、平成６（1994）年５月から７月にかけて上田原ポンプ場建設工事に伴い（ＭＹ1994-1)、また同年７月に個人住宅建設工事に伴い（ＭＹ1994-2)、森山遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を掲載する。

2．　店舗付き住宅建設に伴う埋蔵文化財試掘調査（ＭＹ1991-1）は、藤本芳一からの依頼を受け、四條畷市教育委員会が調査を実施した。森山遺跡（ＭＹ1992-1・ＭＹ1993-1・ＭＹ1994-1）の発掘調査は、いずれも住宅・都市整備公団より委託を受け、四條畷市教育委員会が実施した。森山遺跡（ＭＹ1994-2）の発掘調査は、藤本隆由からの依頼を受け、四條畷市教育委員会が実施した。調査期間等は本文中に記載している。

3．　店舗付き住宅建設に伴う埋蔵文化財試掘調査（ＭＹ1991-1）は、四條畷市教育委員会歴史民俗資料館主査　野島　稔、技術職員　村上　始を担当者として実施した。森山遺跡（ＭＹ1992-1・ＭＹ1993-1）の発掘調査は、四條畷市教育委員会歴史民俗資料館主任　野島を担当者として、森山遺跡（ＭＹ1994-1）の発掘調査は、野島の指導のもと、村上を担当者、大塚小百合を調査補助員として、森山遺跡（ＭＹ1994-2）の発掘調査は、野島の指導のもと、村上を担当者として実施した。(肩書はいずれも当時)

4．　発掘調査実施にあたっては、藤本芳一、藤本隆由、住宅・都市整備公団、地元自治会から多大なる御配慮・御協力を得た。記して厚く感謝の意を表したい。

5．　発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

　大阪府教育庁文化財保護課、櫻井敬夫氏（故人)、瀬川芳則氏(元関西外国語大学教授)、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問)、佐久間貴士氏（元大阪樟蔭女子大学教授)、虎間秀喜氏（元岸和田市教育委員会)、森村健一氏（元堺市文化財課)、村瀬　陸氏（奈良市埋蔵文化財調査センター)、野島　稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館館長)、佐野喜美氏(前四條畷市立歴史民俗資料館館長)。(順不同)

6．　出土遺物の整理・図面作成などは、調査当時の一次整理に加え、四條畷市教育委員会生涯学習推進課上席主幹兼主任　村上　始、主任　實盛良彦が、臨時職員　田伏美智代の協力を得て行った。

7．　本書は、村上・實盛が、分担して執筆・編集を行った。文責者は各文末に記載している。

8．　発掘調査の出土遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．　本書中のレベルは、T.P.(東京湾平均海面)を用いた。

2．　土色の色調は、1994 年度版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

3．　報告図面の表示方位は、平成６年度１次調査については当時標準であった（旧）日本測地系の国土座標（第Ⅵ座標系）に基づく座標北である。それ以外の調査は磁北である。

4．　須恵器の編年は、田辺昭三のもの（田辺 1981）と中村浩のもの（中村 2001）を併記した。古代土器の編年は主に古代の土器研究会のもの（同 1992、1993）に依拠した。中世土器の編年は、中世土器研究会のもの（同編 1995）に準拠した。

本　文　目　次

巻頭写真図版
例　言・凡　例
目　　次
第１章　遺跡の位置と歴史的環境・・・

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図・・・

写　真　図　版　目　次

巻頭写真図版１　１．森山遺跡　遠景（北から・平成 10 年）
　　２．森山遺跡　遠景（南西から・平成 10 年）
巻頭写真図版２　１．ＭＹ1994-1　第２遺構面完掘全景（西から）
　　２．ＭＹ1993-1　籠目土器

写真図版１　１．森山遺跡　遠景（北西から・昭和 62 年頃）
　　２．森山遺跡　調査前全景（東から・平成３年）
写真図版２　１．ＭＹ1991-1　排水施設検出状況（南から）
　　２．ＭＹ1991-1　排水施設
写真図版３　１．ＭＹ1991-1　調査地区西壁断面（南東から）
　　２．ＭＹ1991-1　完掘全景（北から）
写真図版４　１．ＭＹ1993-1　遺構面検出状況（西から）
　　２．ＭＹ1993-1　木質検出状況（南から）
写真図版５　１．ＭＹ1993-1　遺物出土状況（北から）
　　２．ＭＹ1993-1　調査地区南壁断面（西から）
写真図版６　１．ＭＹ1993-1　調査地区南壁断面（南東から）
　　２．ＭＹ1993-1　完掘全景（東から）
写真図版７　１．ＭＹ1994-1　調査前全景（東から）
　　２．ＭＹ1994-1　第１遺構面全景（北東から）
写真図版８　１．ＭＹ1994-1　第１遺構面　溝１（西から）
　　２．ＭＹ1994-1　第２遺構面検出状況（西から）
写真図版９　１．ＭＹ1994-1　第２遺構面完掘全景（南西から）
　　２．ＭＹ1994-1　第２遺構面　足跡
写真図版10　１．ＭＹ1994-1　第３遺構面全景（西から）
　　２．ＭＹ1994-1　下層確認完掘全景（西から）
写真図版11　１．ＭＹ1994-2　調査状況（東から）
　　２．ＭＹ1994-2　第１遺構面完掘状況（東から）
写真図版12　１．ＭＹ1994-2　第２遺構面完掘状況（東から）
　　２．ＭＹ1994-2　第２遺構面完掘状況（南から）
写真図版13　１．ＭＹ1994-2　第２遺構面完掘状況（東から）
　　２．ＭＹ1994-2　第２遺構面　土坑 102（北から）
写真図版14　１．ＭＹ1992-1　出土遺物（土器）
　　２．ＭＹ1992-1　出土遺物（金属器・石器）
写真図版15　１．ＭＹ1993-1　出土遺物（須恵器）
　　２．ＭＹ1993-1　出土遺物（土師器）

写真図版16　　１．ＭＹ1993-1　出土遺物（籠目土器・臼玉）
　　２．ＭＹ1994-1　出土遺物（陶磁器）
写真図版17　　１．ＭＹ1994-1　出土遺物（縄文土器）
　　２．ＭＹ1994-1　出土遺物（縄文土器）
写真図版18　　１．ＭＹ1994-1　出土遺物（打製石器）
　　２．ＭＹ1994-1　出土遺物（磨石）
写真図版19　　１．ＭＹ1994-2　出土遺物（第１遺構面）
　　２．ＭＹ1994-2　出土遺物（第２遺構面）
写真図版20　　１．ＭＹ1994-2　出土遺物（茶臼）
　　２．ＭＹ1994-2　出土遺物（茶臼）

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

四條畷市は大阪府の北東部に位置する。東は奈良県生駒市・西は大阪府寝屋川市・南は大東市・北は交野市と寝屋川市に接している。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けている。平野地区には、東西方向に一級河川清滝川に沿って清滝街道、南北方向に河内街道と東高野街道が通じている。清滝街道を東進し清滝峠を越えると田原盆地に入り、街道はそのまま田原盆地を東西に横切る。一級河川天野川に沿って南北方向には磐船街道が、南側には、ほぼ東西方向に古堤街道が通じている。

今回報告する森山遺跡は、四條畷市の東部、生駒山系の北東部の山裾に位置する南北約２km・東西約 0.8km の範囲の田原地区に所在し、その東端は、北流する天野川を府県境として奈良県生駒市と接している。地区の地質は、東部が沖積層粘土及び砂礫質で西部の丘陵地は花崗岩及び大阪層群からなっている。遺跡は、生駒山にその源を発し田原盆地を南北に横切りながら北流し、交野市、枚方市を経て淀川へ流入している天野川によって形成された沖積地に立地する遺跡である。

（村上　始・實盛良彦）

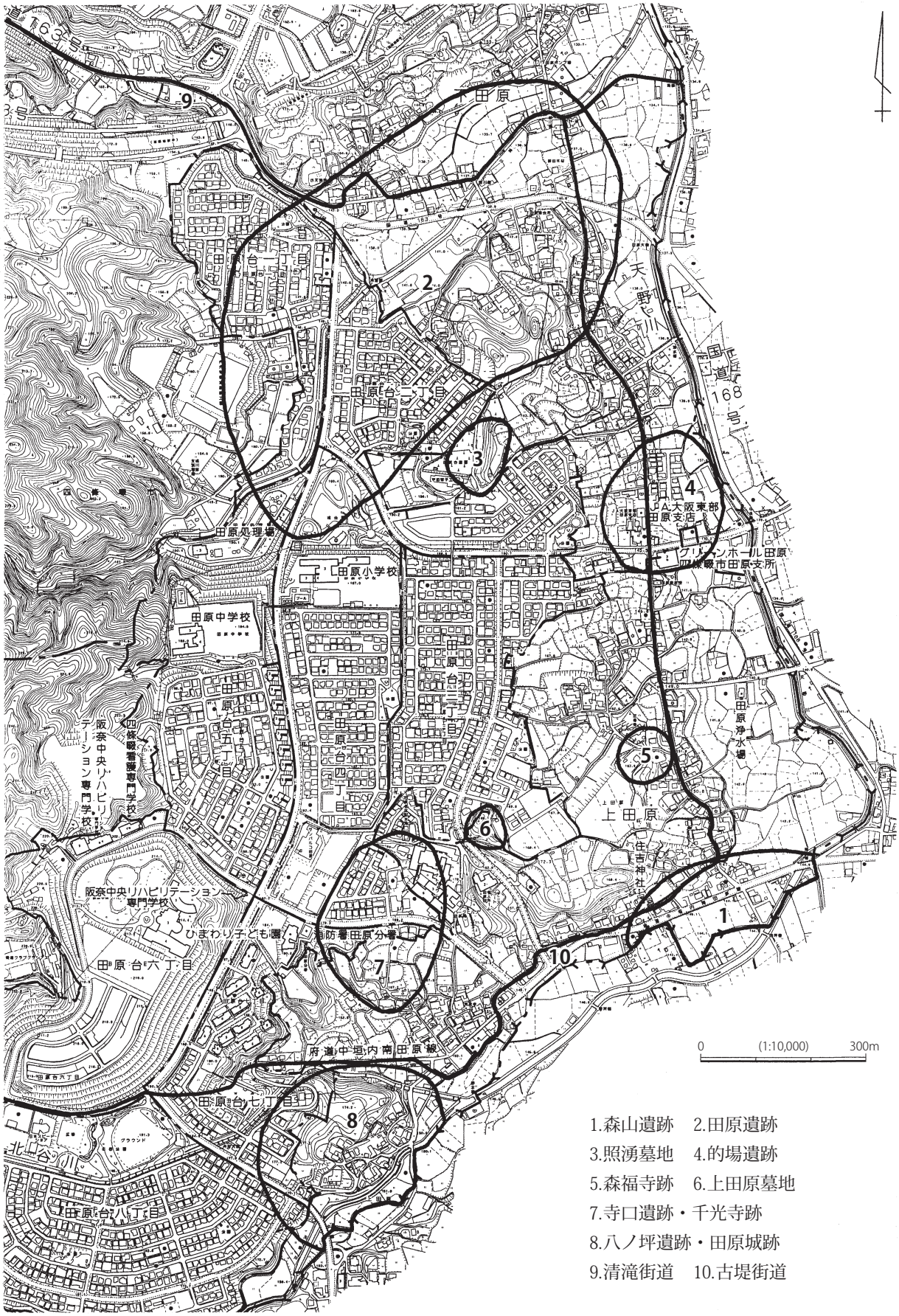
第２節　周辺の歴史的環境

田原地区に関する文献記録の古いものとしては、田原鋳銭司についてのものがある。田原鋳銭司は、奈良市東部の田原地域とする説もあるが（岩橋 1969）、四條畷市および生駒市にまたがる田原地区に所在したとされる（栄原 1972、1993、中村 1972、仁藤 2018）。『続日本紀』神護景雲元年（767）十二月乙酉条と、同神護景雲三年（769）三月戊寅条に「田原鋳銭長官」の任官記事がみえ、平城宮跡第 133 次調査では宮の南面西門にあたる位置の調査で二条大路北側溝にあたる SD1250 から「田原銭五千文」の付札が出土した（奈良国立文化財研究所 1982）。存続期間には諸説あるが、これらの資料に裏付けられるように奈良時代に銭貨の製造を担っていた。

文献史料におけるその後の田原地区については、保延５年（1139）の『小松寺奉加帳』に「田原郷」とみえる（山口編 1972）。また久安元年（1145）の近衛天皇綸旨に「田原西郷」・「同東郷」と記されたものがあり（山口 1979）、内容には検討を要するとする意見もあるが、平安時代には天野川を境にして「大和の田原」と「河内の田原」に分かれ、土豪が中心となって開発したとされる。その後、開発領主としての権利を維持するために安貞二年(1228)に七条院に寄進して七条院領田原荘となり、修明門院、大覚寺統へと継承されていった。

応仁の乱の時期には当地も戦乱に巻き込まれ、文明年間（1470 年代）には大和の筒井氏の侵攻を受けた。これを契機に片田・滝寺・野田・照涌・佐水・森山・中番・八ノ坪の地区が一村を形成して西田原村と称したと考えられている。その後文禄三年（1594）に速見甲斐守により検地が行われ、江戸時代には幕府の直轄領となった。慶安二年（1649）に大坂町奉行曽我丹波守の再検地を受けて、西田原村は六百石の村高となった。慶安四年（1651）には上･下田原村に分村し、それぞれ村方三役をおく独立村落となった。明治 22 年の町村制施行により、上･下田原村は合併し田原村と称するようになり、昭和 36 年に田原村は四條畷町と合併し四條畷町となり、昭和 45 年７月に四條畷市となった。

田原地区の遺跡としては、昭和 50 年頃から始まった住宅公団の開発に伴う発掘調査により、旧石器時代、縄文時代早期、後期、弥生時代前期、中世の集落跡であることが判明した田原遺跡がある（野島・櫻井 1980、野島 1981）。加えて、平安時代の社寺跡である森福寺跡、鎌倉時代の集落跡である的場遺跡、縄文時代、古墳時代、中世、近世の集落跡である森山遺跡（奥編 1993）、中世の寺跡、墓地である寺口遺跡・千光寺跡（村上 1999、2012、四條畷市史編さん委員会編 2016）、南北朝時代から戦国時代の集落跡、城館跡である八ノ坪遺跡・田原城跡（野島 1981、1986、村上 2001）があげられる。



1.森山遺跡　2.田原遺跡
3.照湧墓地　4.的場遺跡
5.森福寺跡　6.上田原墓地
7.寺口遺跡・千光寺跡
8.八ノ坪遺跡・田原城跡
9.清滝街道　10.古堤街道

第１図　周辺遺跡分布図

また、田原地区の上田原と下田原のそれぞれの地域には、両墓制の埋め墓（埋葬地）と詣り墓の墓地が現存しており、下田原地区の片田墓地は滝寺・片田地区のオバカ（埋め墓）であり、小谷にタチバカ（詣り墓）がある。周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている中世から近世の両墓制墓地としては、上田原墓地、照涌墓地があげられる。その他の文化財としては、住吉神社の石槽（大阪府指定有形文化財）や市内に７基現存している石造十三仏のうちの２基などがあげられる。

戦国大名である三好長慶は、天文 18 年（1549）三好政長を倒して摂津、次いで室町幕府 13 代将軍足利義輝を追放して京都を支配し、管領細川氏にかわり権力をふるい畿内・四国の一部を支配し室町幕府の実権を握った。永禄２年(1559)に将軍政治が復活したことにより独裁政治に終止符が打たれ、京都を撤退し、畠山氏の本拠地である河内をうばって畿内支配をはかる。その畠山氏の守護代が居城とした飯盛城に永禄３年（1560）、高槻の芥川山城から移った。永禄７年（1564）三好長慶が城中で没したのち三好義継があとを継ぐが、松永久秀と三好三人衆との対立が激化する。このようななか飯盛城は織田信長入洛までの間、畿内政治の中心地となった。遺跡としての飯盛城跡は標高約 314mの飯盛山の山頂に構えられた山城で、近年四條畷・大東の両市で調査を進め、東西 400m、南北 700mの城域に配置される曲輪群、永禄期にさかのぼるとみられる石垣群の確認や、建物跡、城道の検出、普請の状況など多くの成果をあげている（李編 2020）。

田原城は、その飯盛城から東へ延びる標高 178.6mの尾根上にある。飯盛城からの尾根筋が、田原城の北西へと通じている格好である。本郭は 南北約 26m・東西約７ｍの削平地で、周囲との比高差は約 30m高くなっている。この北には清滝街道が、東には古堤街道がはしり、河内と大和を結ぶ要所の地に築かれており、飯盛城の弱点である大和方面からの攻撃を防ぐための支城としての役割を奈良県生駒市に所在する北田原城とともに担っていたと考えられる（實盛 2013）。この田原城のある八ノ坪には現在でも城郭に関連する地名「城の下」「門口」「土居の内」「的場」「矢の石」などが残っている。城の本郭は、廃城後に磐船神社から分祀された住吉神社が建立されている。本郭の西側には深い堀切があり、本郭と二の郭とを区切っている。この堀切は、北に延びて深い堀切道となり、井戸郭に出る。井戸郭は窪地となり、二カ所の井戸と、土塁にせき止められた貯水池の跡がみられる。西出丸は削られ現在畑地となっている。西方は生駒山系と地続きのため出丸が配され、全体を東西に羽を広げた形をしている。南部の谷間は現在宅地となっているが段が残っており、居館等の存在を思わせる。北・東・南の三方には川が流れ、城跡の丘陵全体を区切って外堀の役目を果たしている。北西の尾根は飯盛城に続き城内に直進できるようになっている。その両脇には深さ７ｍのＶ字形の空堀を発掘調査で確認した。城の周囲は、空堀、天野川、北谷川で護られている。「殿様屋敷」伝承地の調査では掘立柱建物跡や石組井戸を確認し、城に付随する居館の存在を確認した。これまでの調査から城の構築年代は 14 世紀中葉とみられ、その後 16 世紀後半まで城として機能したとみられる（野島 1986）。

この田原城の城主は田原対馬守と伝えられ、口伝の他に天保年間の文献に「この地に永禄年間の当地守護田原対馬守の城跡があったと伝える」とあるのと、「文禄年間に田原城主の娘が岡山地区の領主に嫁いだ」とする文献が存在する（山口編 1972）。しかし田原城を築いた人物については不明である。ただ現在の禅宗月泉寺は城主たちの菩提寺であった真言宗千光寺の後身で、江戸期以前の位牌も現存している。それらのうち最も古いものは、延元元年（1336）のものであり、その戒名に「節・忠」の文字がみられることや南朝の年号を使っていることから南朝側に殉じたもので、その後につづく３代は北朝の年号を使っていることから、足利氏の治世に地位をえた領主ではないかと考えられている。田原城は、現在の場所に築かれる以前の鎌倉時代（13 世紀代）には約 150m北の「古城」と呼ばれている地(森福寺跡と同位置)にあったと伝えられており、田原氏もそこに居住していたと考えられる。また、千光寺跡の調査で確認した墓地で最も古い墓（３号墓）の年代とも一致する。しかしこの地は現在も未調査のため詳細は不明である。

千光寺跡に関しては、現在の禅宗月泉寺が管理する墓地に田原城主田原対馬守の墓と伝える五輪塔が所在し、月泉寺が明治の初期に寝屋川から移ってくる以前、千光寺という真言宗の寺が存在していたという口伝があり、「千光寺谷」と呼ばれていた。小字名としても「寺口」という名が残っている。その地で平成６年度に住宅・都市整備公団が造成工事を行なうにあたって発掘調査を実施した結果、南側の平坦面と西側斜面上が墓地で、池を隔てた北側が寺跡であることが判明した（四條畷市史編さ

ん委員会編 2016)。墓地の斜面上においては、初代田原城主夫婦の墓と考えられる３号墓(13 世紀代)、平坦地では 25 基以上の五輪塔群と総供養塔（６号墓・12 世紀末～13 世紀前葉）などを確認した。遺物としては、龍泉窯製の青磁袴腰香炉（大阪府指定有形文化財）や龍泉窯製酒会壺など内外の陶磁器などが出土した。寺跡においては、80 数基の土坑や柱穴・溝などの他に東西に伸びる長さ約 15.5m・幅約 1.2mの２列の花崗岩の石列を確認し、その断面観察から版築工法の土塀の基礎であることが判明した。遺物としては陶磁器類や青銅製懸仏・大量の瓦などが出土しており、その中から『千光寺』と刻印された平瓦を確認したことから千光寺の実存が確認できた（四條畷市史編さん委員会編 2016)。またこの寺は、単に墓を管理していたのではなく当時流行していた「茶の湯」が行なわれていたことが天目茶碗や茶臼の出土からも確認できた。平成 13 年度にその東側隣接地において駐車場を建設するための造成工事が計画されたため、平成 14 年２月から発掘調査を実施し、平成６年度の発掘調査で確認した土塀の続きの基礎の石列を確認し、千光寺の寺域が飯盛山から東へ舌状に延びた丘陵の先端部まで広がっていることが判明した。その最も東側にあたる基礎石の北側、つまり土塀の内側（寺域内）において、一辺約 63 ㎝・深さ約 21 ㎝の隅丸方形の土坑（その南半分は後世の削平を受けている）を確認し、その中から文字面を上に向けて置いたような状態でキリシタン墓碑が出土した（村上 2012)。

田原地区を走る街道のうち、清滝街道については市内で発掘調査を行った箇所がある。平成５年度から 26 年度にかけて、一般国道 163 号清滝トンネルの西で淀川水系清滝川渓流保全工事に伴い調査を行い、発掘調査を行った全調査地区で清滝街道の遺構を確認した（村上・實盛 2017）。平成 10 年度の調査では江戸後期以降の街道遺構を検出し、小石により舗装されていた部分があるのを確認した。これは坂道に対応した整備であろう。一方、隣接した平成５年度調査ではルートが少し平行にずれる別の街道遺構を検出しており、街道の構築土内より出土した土器から中世の街道遺構と考えられる。すなわち、この場所では中世の街道より少しずれた位置に江戸後期の街道が築かれたことが判明した。土砂災害等の復旧に伴い街道の位置が変更されたものとみられる。この街道の脇にあたる位置の谷状遺構などからは石仏や和鏡が出土した。特に和鏡は巨石の脇から出土しており、特筆すべき出土状況である。和鏡それ自体にも懸垂用の穿孔があり、御正躰等として用いられたとみられる点も注意すべきである。清滝・逢阪地区は巨石信仰が今に残る地域であり、逢阪の村内へと入る清滝街道の分岐道沿いには現在も巨石の狭間に役行者が祀られ信仰されている。これらの遺物はこういった信仰形態と関わり、街道通行の安全等を祈る形でこの場所に遺されたものと考えられる。平成 11 年度および 19 年度調査でも街道遺構を検出し、この箇所では街道のルートは中世・近世ともに同じルートを通るものとみられる。平成 26 年度調査でもほぼ同じルートだったが、若干の位置変更が行われていた。

平成 22 年には清滝峠の東側（清滝トンネル南側）の地点で清滝街道の調査を行った（村上・實盛 2011）。調査地区は、大阪側から清滝峠を越え、下り始めた田原盆地の入り口地点にあたる。この調査地区付近に関しては、大阪府教育委員会が発行した『奈良街道』(大阪府教育委員会編 1989）に取り上げられているのみで、そこでは国道 163 号が旧清滝街道であるとされていた。この調査で検出した街道は、南側の山裾を削平し道路面を成形しており、南側にのみ側溝が掘られ、それが後世に広げられていて道路部分の幅がやや狭められていたが、側溝と道路部分を合わせると幅が約 2.5～３mあり、明治時代の文献に記されている清滝街道の幅「八尺」とほぼ一致していた。四條畷市域の西端から清滝峠に至るまでの清滝街道からほぼ直線的に山裾伝いに続く位置にあたっており、この遺構が本来の清滝街道であると判断できた。街道の側溝からは中世から近世にかけての銅銭六点が、近接した位置で、いずれも拳大の石の直下から出土した。このことから、これらの銅銭は意図的にその位置に置かれたと考えられる。この場所は村と村の間に立地しているので、交通の安全を願って置かれた可能性がある。出土した六点のうち一点が寛永通宝で、他の五点は中世に使われた宋銭であったので、この祭祀が行われた時期は江戸時代の初頭と考えられる。他の出土遺物としては、中世から近代にかけての陶磁器・瓦などがあげられる。明治 21 年測量の地図ではすでに調査直前と同じ地形であることから、この頃には街道としての機能は果たしていなかったと考えられる。

以上のことから、清滝街道は遅くとも中世から街道として機能しており、明治時代初頭までは利用され、その後、国道 163 号が開通したためこの街道は利用されなくなり、現在に至ったのではないかと考えられる。

（村上・實盛）

第２章　調査の経過

第１節　既往の調査

森山遺跡は、四條畷市大字上田原森山に所在する。この田原地区においては、住宅・都市整備公団による開発事業に伴い周辺道路の改良工事が実施されていた。このような周辺の開発が進むにつれ、旧家の建ち並ぶ上田原の集落においても再開発が行なわれるようになった。そのような状況のなか、当地森山において店舗付き住宅建設が計画され、平成３（1991）年４月 18 日と 23～25 日にその開発工事に伴う試掘調査を行った結果、中世から近世に至る遺物が出土した（今回報告）。また、都市計画道路両国橋線（府道中垣内・南田原線）の拡幅工事計画に伴い大阪府枚方土木事務所長から四條畷市教育委員会教育長へ平成４年１月 31 日付枚土第 736 号で「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」があり、平成４年２月３日に計画用地内に計２か所のトレンチを設定し試掘調査を実施した結果、鎌倉時代から江戸時代の遺物包含層および集落跡と水田面と思われる遺構面を確認した。これらの発見をもとに東西約 350m・南北約 130mの地域について、大阪府枚方土木事務所長から四條畷市教育委員会を経由し文化庁長官へ平成４年５月６日付枚土第 83 号で文化財保護法第 57 条の６第１項（当時）の規定に基づく遺跡発見の通知を行った。

この結果に基づき平成４年度に大阪府教育委員会が府道中垣内・南田原線の拡幅工事に伴う発掘調査を行ない（奥編 1993）、４面にわたる中世から現代に至る耕作に伴う遺構面を確認するとともに、古墳時代後期や奈良時代の遺物が出土した。このことから、周辺地においてもこれらの時代の集落の存在を想定している。

（村上・實盛）

第２節　調査の経過

平成３年度第１次の店舗付き住宅建設に伴う試掘調査（ＭＹ1991-1）については、四條畷市大字上田原 488-1 他１筆において店舗付き住宅建設が計画され、平成元（1989）年３月 27 日に大阪府建築部開発指導課へ都市計画法開発許可事前協議書の提出があり、同年３月 31 日現地調査のうえ、四條畷市と都市計画法第 32 条（当時）に基づく協議を行うこと、加えて大阪府教育委員会文化財保護課および四條畷市と埋蔵文化財について協議するよう平成２(1990)年３月１日付調第 299 号で指導があった。その指導内容に基づき同年６月４日に四條畷市へ事前協議書の提出があり、同年６月８日に協議を行った。その協議内容に基づき平成３（1991）年４月 18 日に２×４ｍのトレンチ一箇所を設定して試掘調査を行った結果、褐色粘質土層より土師器が出土した。その結果をもとに協議を行い、工事により遺跡が破壊される石油地下タンク設置箇所について、同年４月 23 日から 25 日までその記録保存のため試掘調査を延長し発掘を実施した。調査面積は約 29 ㎡で、調査は遺構面の検出に努めながらバックホーと人力を併用し掘削を行った。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計１箱であった。

平成４年度第１次と５年度第１次の発掘調査（ＭＹ1992-1・1993-1)については、四條畷市大字上田原において住宅・都市整備公団により田原２号汚水幹線の築造工事が計画された。その予定地の東側に隣接している場所においては、平成４（1992）年２月３日に府道中垣内・南田原線の拡幅工事計画に伴い計２か所のトレンチを設定し試掘調査を実施した結果、鎌倉時代から江戸時代の遺物包含層および集落跡と水田面と思われる遺構面を確認していた。その状況から、今回の工事予定地においても遺物、遺構の存在が十分に考えられたため、本市教育委員会は、住宅・都市整備公団と協議を行なった結果、築造工事によって遺跡が破壊される汚水幹線築造箇所について、平成４年 12 月 11 日から平成５（1993）年２月 25 日までと、平成５年 10 月５日～28 日まで、二年度にわたってその記録保存のため発掘調査を実施した。調査面積は平成４年度約 429 ㎡と平成５年度約 76 ㎡で、出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で平成４年度分が計４箱、平成５年度分が計６箱であった。

平成６年度第１次の発掘調査（ＭＹ1994-1)については、四條畷市大字上田原において住宅・都市整

第２図　調査地区位置図（座標は世界測地系）

備公団により上田原ポンプ場の建設工事が計画され、平成５年９月 28 日に住宅・都市整備公団局長から四條畷市教育委員会を経由し文化庁長官へ文化財保護法第 57 条の２第１項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。同年 11 月４日付教委文第 1-5190 号で発掘調査が必要との通知があった。予定地の北西側に隣接している場所においては、平成４年度に大阪府教育委員会が府道中垣内・南田原線の拡幅工事に伴う発掘調査を行ない、中世から現代に至る耕作に伴う遺構面を確認している状況から、今回の建設予定地においても遺構の存在が十分に考えられたため、本市教育委員会は、住宅・都市整備公団と協議を行なった結果、工事によって遺跡が破壊される約 140 ㎡について、平成６（1994）年５月 17 日から同年７月８日まで、その記録保存のため発掘調査を実施した。調査は既往調査の結果から、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計２箱であった。

平成６年度第２次の発掘調査（ＭＹ1994-2）については、四條畷市大字上田原 239 において個人住宅建設が計画され、平成６年５月８日に四條畷市教育委員会を経由し文化庁長官へ文化財保護法第 57 条の２第１項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。その計画用地内で確認調査を実施した結果、中世～近世の遺物包含層および遺構面を確認した。その結果をもって協議を行い、遺跡が工事によって破壊される住宅建設予定地の発掘調査を実施することとなった。調査面積は約 252 ㎡で、調査期間は平成６年７月４日から８日までであった。調査は確認調査の結果から、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計１箱であった。

（村上・實盛）

第３章　調査の成果

第１節　1991-1 次調査

１．基本層序

調査地区は、生駒山にその源を発し田原盆地を南北に横切りながら北流し、交野市、枚方市を過ぎて淀川へ流入している天野川によって形成された沖積地に立地する。そのため基本層序からもわかるように天野川による堆積と思われる土層が多くみられた。

試掘調査地区の調査前現況は水田地であったが、開発に伴い宅地造成のために 0.15～0.4mほど盛土されていた。その下層はおよそ 0.2mの耕土であり、その下層は 0.1～0.2mほどの床土であった。

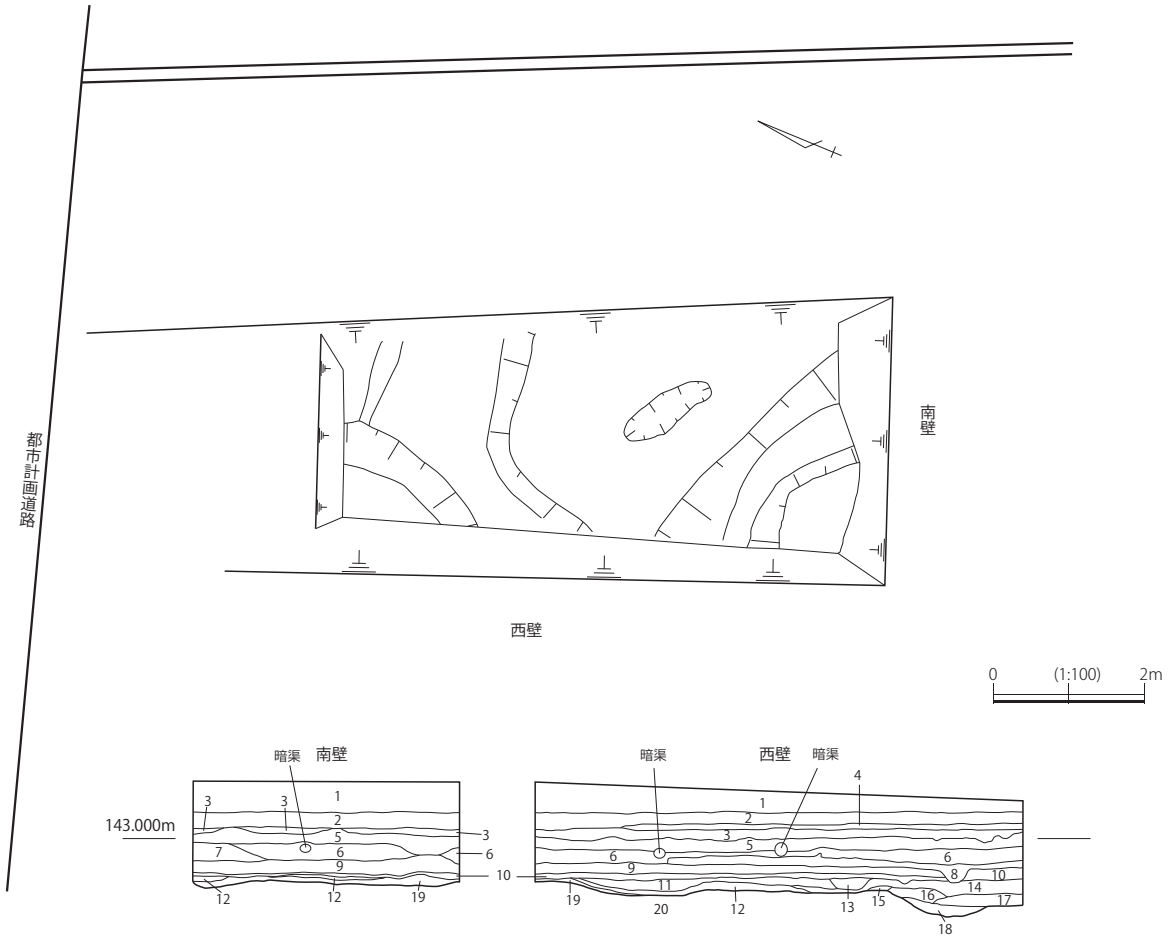
床土の下層に 0.15mほど中～近世の遺物包含層が堆積し、その下面で中世のものと思われる排水施設を検出した。これを第１遺構面とした（第３図６層上面）。その下層には 0.4～0.9mにわたり、流水堆積によるとみられる粗砂、粘質土を中心とした堆積土層を確認した。これは、遺跡が天野川によって形成された沖積地に立地することから、天野川による堆積と思われる。その下面を第２遺構面として検出した。今回の調査では、河川の氾濫によって旧地形が埋まっていく状況を層位的に確認することができた。その下層は遺物を包含せず地山であった（第３図）。

２．検出遺構

この調査では２面の遺構面を確認した。第１遺構面は標高が北端で T.P.＋142.900m、南端で T.P.＋142.880mであった。この遺構面で検出したのは暗渠排水施設である（写真図版２）。施設は調査地区内において東西方向のもの２本、南北方向のもの１本を確認した。検出したのはいずれも一部で、施設の幅はいずれも約 15cm 程であり、竹材を組み合わせて構築していた。これらはいずれも湿田のための排水施設であったと思われる。この遺構面からは、土師質土器皿、瓦器などが出土した。出土遺物から中世の遺構面の可能性がある。この面は 1994-1 次調査第１遺構面と対応する可能性がある。また大阪府 1992 年度調査第１遺構面（奥編 1993）と対応する可能性がある。

第２遺構面は第１遺構面下 0.4～0.9mにわたり、流水堆積によるとみられる粗砂、粘質土を中心とした堆積土層を確認したその下面で、遺跡が天野川によって形成された沖積地に立地することから、天野川による堆積と思われ、天野川の氾濫原と判断した。今回の調査では、その氾濫によって旧地形が埋まっていく状況を層位的に確認することができた。遺構面として検出したのは河川内の底部分の一部とみられ、平面図として図化したのはその起伏の状況である（第３図、写真図版３）。遺構面の標高は北端で T.P.＋142.120m、南端で T.P.＋142.430mであった。

（實盛）



1　盛土
2　旧耕土
3　床土
4　灰色粘質土　4/1
5　暗青灰色粘質土　4/1
6　明黄褐色粗砂層　6/6　明青灰色微砂層混入
7　灰色粗砂層　5/1
8　緑灰色粘土層　5/1　礫を含む
9　暗緑灰色粘質土　4/1
10　暗灰色粘土層　3/
11　緑灰色粘質土　5/1
12　青灰色粘質土　6/1
13　暗緑灰色粘質土　4/1
14　青灰色微砂層　6/1
15　暗青灰色粘質土　4/1
16　青灰色粘質土　5/1
17　オリーブ黄色粗砂層　6/4
18　明黄褐色粗砂層　6/6
19　浅黄色砂質土　7/3
20　明黄褐色粗砂層

第３図　調査地区平面図・断面図（ＭＹ1991－１）

第２節　1992-1 次調査

１．基本層序

調査地区は、生駒山にその源を発し田原盆地を南北に横切りながら北流し、交野市、枚方市を過ぎて淀川へ流入している天野川によって形成された沖積地に立地する。そのため基本層序からもわかるように天野川による堆積と思われる土層が多くみられた。

発掘調査地区の調査前現況は、水田地であった。調査は水田耕土および床土を除去したのちに開始した。このため断面図上は水田耕土および床土を記載していないが（第４図)、この上部に 0.1～0.2ｍほどの床土と、およそ 0.2ｍの耕土が存在した。

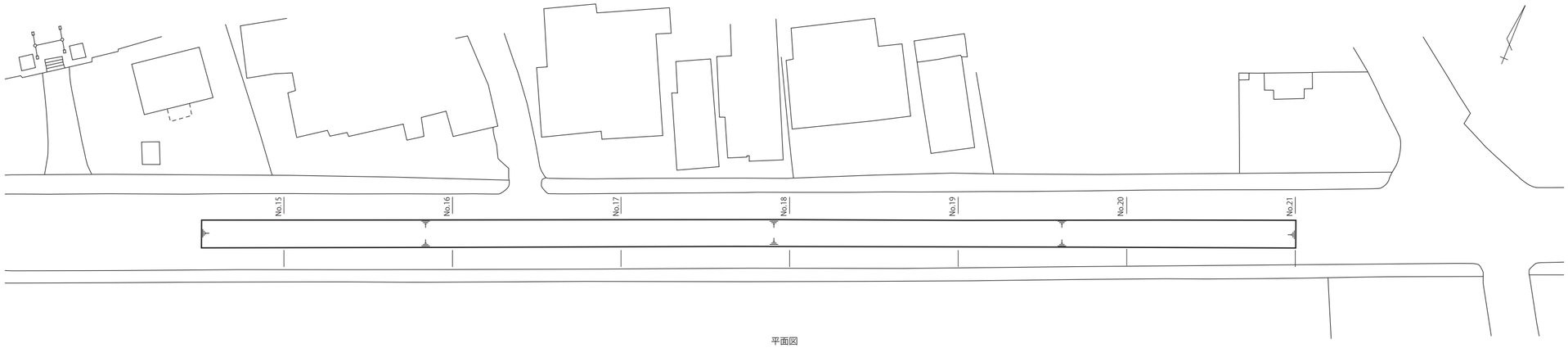
床土の下層には 0.9～1.7ｍにわたり、流水堆積によるとみられる粗砂、細砂、シルト、粘土を中心とした堆積土層を確認した。これは、遺跡が天野川によって形成された沖積地に立地することから、天野川による堆積と思われる。今回の調査では、その氾濫によって旧地形が埋まっていく状況を層位的に確認することができた。その下層は遺物を包含せず地山であった（第４図)。

２．検出遺構

この調査では床土の下層 0.9～1.7ｍにわたり、流水堆積によるとみられる粗砂、細砂、シルト、粘土を中心とした堆積土層を確認した。これは、遺跡が天野川によって形成された沖積地に立地することから、天野川による堆積と思われる。今回の調査では、その氾濫によって旧地形が埋まっていく状況を層位的に確認することができた。堆積土層がなくなる調査終了面の標高は、東端で T.P.＋140.800ｍ、西端で T.P.＋141.450ｍであった。

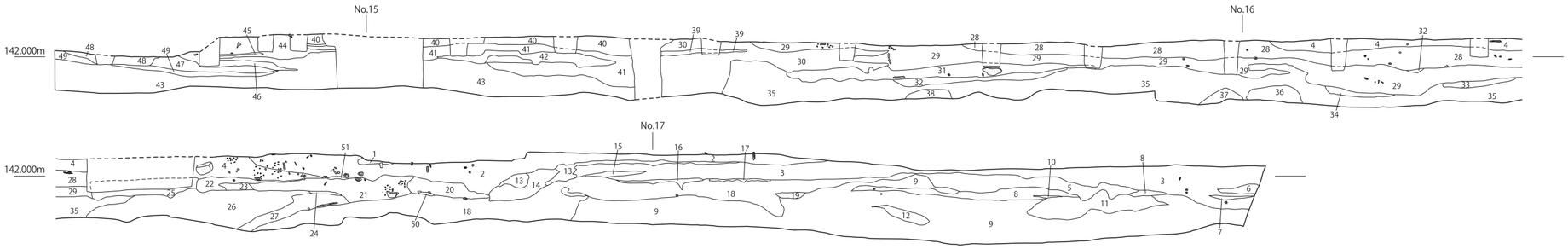
この堆積土層内から遺物が出土した。調査地区は延長 130ｍにわたるため、本体工事用に 20ｍごとに設置されていた杭により、No.15～20 の各地区に分けて遺物を取り上げた（第 11 図、写真図版 14)。出土遺物には、土師器甕（第 11 図－１・２、写真図版 14－１－１・２)、土師器皿（第 11 図－３、写真図版 14－１－３)、須恵器壺（第 11 図－４、写真図版 14－１－４)、鉄鎌（第 11 図－５・６、写真図版 14－２－５・６)、鉄釘（第 11 図－７、写真図版 14－２－７)、銅銭（第 11 図－８・９、写真図版 14－２－８・９)、打製石器（第 11 図－10、写真図版 14－２－10）などがあった。このように出土遺物の時期は弥生時代以前～近世までのものが含まれていた。

（實盛）



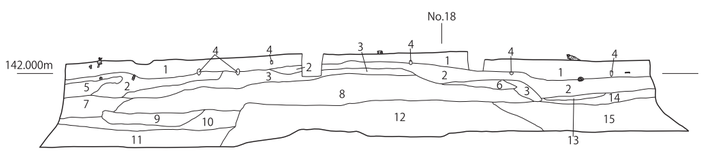
平面図

0 (1:500) 20m



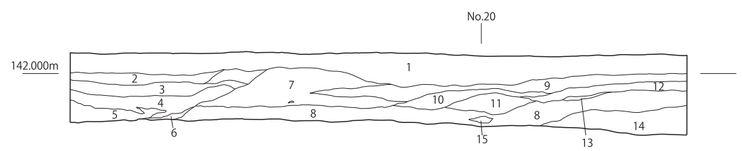
1 オリーブ黄色細砂 7.5Y 6/3
2 暗オリーブ灰色粘土 5GY 4/1
3 暗オリーブ灰色粘土 2.5GY 4/1
4 緑灰色シルト 7.5GY 5/1
5 明オリーブ灰色シルト 5GY 7/1
6 灰白色細砂 N 7/0
7 黄褐色粗砂 10YR 5/8
8 明緑灰色細砂 7.5GY 8/1
9 明緑灰色礫 10GY 7/1
10 灰白色礫 2.5GY 8/1
11 暗オリーブ灰色粘土 2.5GY 4/1
12 明緑灰色細砂 10GY 7/1
13 明オリーブ灰色細砂 2.5GY 7/1
14 暗オリーブ灰色シルトと細砂 5GY 4/1
15 灰白色粗砂 2.5GY 8/1
16 オリーブ灰色粗砂 5GY 6/1
17 灰色細砂 N 4/0
18 橙色礫 5YR 8/6
19 灰白色細砂 5GY 8/1
20 オリーブ灰色シルト 5GY 5/1
21 オリーブ灰色シルトと細砂 2.5GY 5/1
22 灰白色礫 N 8/0
23 オリーブ灰色細砂 5GY 6/1
24 明緑灰色細砂 7.5GY 7/1
25 オリーブ灰色細砂 10Y 6/2
26 黄橙色礫 10YR 7/8
27 暗オリーブ灰色粘土 5GY 4/1
28 緑灰色シルト 7.5GY 6/1
29 灰色シルト 7.5Y 4/1
30 灰白色礫 5Y 8/1
31 緑灰色シルト 7.5GY 6/1
32 灰白色細砂 2.5GY 8/1
33 灰白色細砂 5Y 7/2
34 灰オリーブ色細砂 5Y 6/2
35 浅黄色礫 5Y 7/3
36 浅黄色粘土 5Y 7/4
37 オリーブ色シルト 5Y 6/6
38 オリーブ色粘土 5Y 6/6
39 暗オリーブ灰色シルト 2.5GY 3/1
40 暗オリーブ灰色シルト 2.5GY 4/1
41 オリーブ灰色粗砂 7.5GY 6/1
42 暗オリーブ灰色シルト 2.5GY 3/1
43 明オリーブ灰色礫 2.5GY 7/1
44 暗緑灰色粘土 7.5GY 4/1
45 灰白色細砂 2.5GY 8/1
46 暗オリーブ灰色シルト 2.5GY 4/1
47 灰白色粗砂 2.5GY 8/1
48 淡黄色シルト 5Y 8/4
49 オリーブ灰色細砂 2.5GY 6/1
50 灰白色粗砂 2.5GY 8/1
51 オリーブ灰色粗砂 5GY 6/1

No.15-17 部分断面図



1 暗オリーブ灰色粘土 5GY 4/1
2 暗オリーブ灰色粘土 2.5GY 4/1
3 暗オリーブ灰色シルト 5GY 7/1
4 灰白色粗砂 2.5GY 8/1
5 明緑灰色礫
6 暗オリーブ灰色細砂 2.5GY 7/1
7 橙色粗砂 5YR 8/6
8 明緑灰色礫 10GY 7/1
9 明オリーブ灰色細砂 2.5GY 7/1
10 灰白色粗砂 2.5GY 8/1
11 橙色粗砂 5YR 8/6
12 橙色礫 5YR 8/6
13 灰白色細砂 2.5GY 8/1
14 灰白色粗砂 2.5GY 8/1
15 黄橙色礫 10YR 7/8

No.18 部分断面図



1 明緑灰色砂質土 7.5GY 7/1
2 オリーブ灰色シルト層 2.5GY 6/1
3 明オリーブ灰色砂層 2.5GY 7/1
部分的にシルト層混じり
4 明緑灰色砂層（シルト層） 10GY 8/1
5 灰白色砂礫層 2.5GY 8/1
6 暗オリーブ灰色シルト層 2.5GY 3/1
7 灰白色砂礫層 N 8/
8 灰白色砂礫層 N 7/
9 明緑灰色及び暗オリーブシルト混じり層
10 暗オリーブシルト層 2.5GY 4/1
11 灰白色砂層 2.5GY 8/1
12 灰白色砂層 5GY 8/1
13 灰色シルト層 5Y 4/1
14 明緑灰色砂層 10GY 8/1
15 青灰色粘土層 5PB 5/1

No.20 部分断面図

0 (1:100) 5m

第４図　調査地区平面図・断面図（ＭＹ1992-１）

第３節　1993-1 次調査

１．基本層序

調査地区は、生駒山にその源を発し田原盆地を南北に横切りながら北流し、交野市、枚方市を過ぎて淀川へ流入している天野川によって形成された沖積地に立地する。そのため基本層序からもわかるように天野川による堆積と思われる土層が多くみられた。

発掘調査地区は 1992-1 次調査の東に隣接しており、調査前現況は、宅地であった。調査は盛土等を除去したのちに開始した。このため断面図上はこれらの土層を記載していない（第５図）。

断面図第２、３層は中～近世の包含層とみられ、それらを除去した T.P.＋142.000m付近で、1991-1 次および 1992-1 次調査で検出していた流水堆積によるとみられる砂層、シルト層、粘質土層を中心とした堆積土層を確認した。これは、遺跡が天野川によって形成された沖積地に立地することから、天野川による堆積と思われる。今回の調査では、その氾濫によって旧地形が埋まっていく状況を層位的に確認することができた。その堆積は約 1.2～1.4mにわたっており、それが終わる下面を遺構面として検出した。その下層は遺物を包含せず地山であった（第５図）。

２．検出遺構

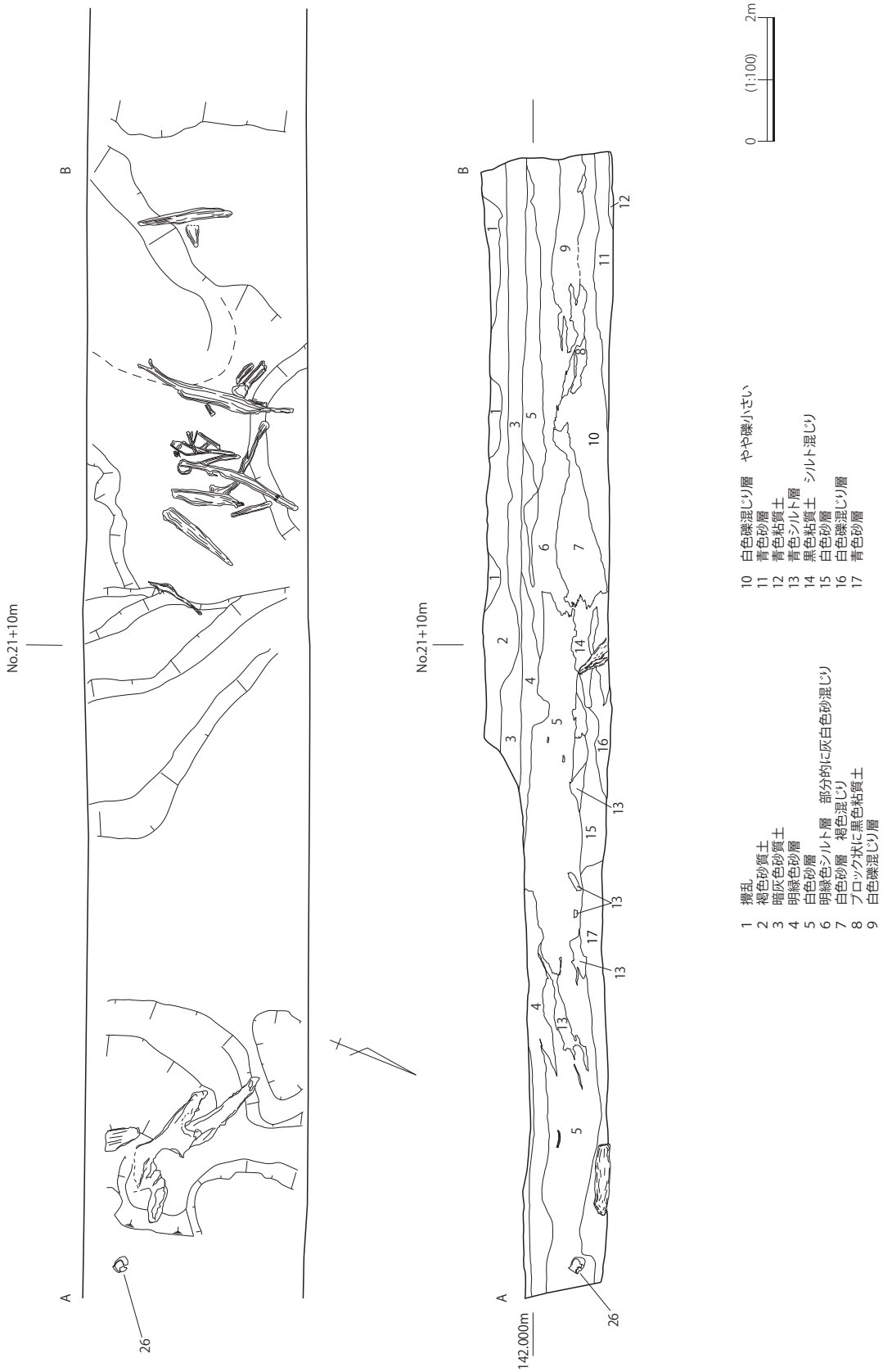
この調査では断面図第２、３層は中～近世の包含層とみられ、それらを除去した T.P.＋142.000m付近で、1991-1 次および 1992-1 次調査で検出していた流水堆積によるとみられる粗砂、細砂、シルト、粘土を中心とした堆積土層を確認した。これは、遺跡が天野川によって形成された沖積地に立地することから、天野川による堆積と思われる。そのためここでいったん遺構面検出を行った後（写真図版４－１）、掘削を開始し、この堆積土層内から遺物が出土した。

出土遺物には、須恵器坏蓋（第 11 図－12・13、写真図版 15－１－12・13）、須恵器坏身（第 11 図－14～16、写真図版 15－１－14～16）、土師器鉢・甕・壺（第 11 図－17・第 12 図－18～26、写真図版 15－２）、土師器籠目土器（第 12 図－27、巻頭写真図版２－２、写真図版 16－１－27）、滑石製臼玉（第 11 図－11、写真図版 16－１－11）などがあった。

遺物の多くは第５層や７層などの砂層からの出土であり、断面にかかっていた土師器甕（第 12 図－26）の出土状況を図化した（第５図－26）。土師器甕の出土標高は口縁部で T.P.＋141.430m、底部で T.P.＋141.160mであった。また、堆積土層内底部近くでは、流木とみられる木質を多く検出した（第５図、写真図版４－２・５－１）。検出した木質群は東と西と２か所のまとまりがあり、東のまとまりの検出高は T.P.＋141.020m、西のまとまりの検出高は T.P.＋141.270mであった。出土遺物の時期は古墳時代のものが多く含まれていた。

遺構面として検出したのは河川内の底部分の一部とみられ、平面図として図化したのはその起伏の状況である（第５図、写真図版６）。今回の調査では、河川の氾濫によって旧地形が埋まっていく状況を層位的に確認することができた。堆積土層がなくなる調査終了面の標高は、東端で T.P.＋140.900m、西端で T.P.＋140.740mであった。

（實盛）



第５図　調査地区平面図・断面図（ＭＹ1993－１）

第４節　1994-1 次調査

１．基本層序

調査地区は、生駒山にその源を発し田原盆地を南北に横切りながら北流し、交野市、枚方市を過ぎて淀川へ流入している天野川によって形成された沖積地に立地する。そのため基本層序からもわかるように天野川による堆積と思われる土層が多くみられた。

今回の調査では３面の遺構面を確認した。

第１遺構面　暗渠排水溝、鋤溝
第２遺構面　人・動物の足跡
第３遺構面　旧河川

以上、調査で検出した遺構は、耕作に伴うものが大半であり、耕作地として利用されていたものと思われる。

今回の調査地区で確認した堆積土層は次のとおりである。この堆積土をみるとほとんどが天野川によるものであることがわかり、今回の調査では、その氾濫によって旧地形が埋まっていく状況を層位的に確認することができた。

以下、基本層序各層について上層から述べることとする。

第Ⅰ層　耕土　上面はT.P.+142.800ｍで厚さ約 30 ㎝。現代の水田。（１層）
第Ⅱ層　耕土下で厚さ約 10～20 ㎝、明黄褐色粗砂（10YR7/6)。現代の床土。（２層）
第Ⅲ層　上面は T.P.+142.400ｍ前後で厚さ約 10～20 ㎝、にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4)。第１遺構面の検出面。（３層）
第Ⅳ層　T.P.+142.000～142.300ｍに存在する灰色基調とする砂層、厚さ約 20～30 ㎝。近世の陶磁器片出土。
第Ⅴ層　上面は T.P.+142.000ｍ前後で厚さ約 20～40 ㎝、青灰色粘土層（10BG5/1)。第２遺構面の検出面（６層）
第Ⅵ層　厚さ約 20～40 ㎝の灰色を基調とする粘土層。近世の陶磁器片出土。（７層）
第Ⅶ層　上面はT.P.+141.500ｍ前後で厚さ約60～100 ㎝の緑灰色を基調とする粘土層及びシルト層。第３遺構面の遺構内堆積土。石鏃出土。（８～13 層）
第Ⅷ層　上面はT.P.+141.500ｍ前後、厚さ約 40～160 ㎝。浅黄橙色粗砂（10YR8/4)。第３遺構面の検出面。(14 層）
第Ⅸ層　第Ⅷ層下に存在する厚さ約 40～80 ㎝の褐灰色粗砂層（10YR4/1）。縄文土器・石器出土。(15 層）
第Ⅹ層　地山。淡黄色粘土層（5Y8/4）。（16 層）

14 層以下の堆積層には、天野川の氾濫によるものと推定される流木がみられた。

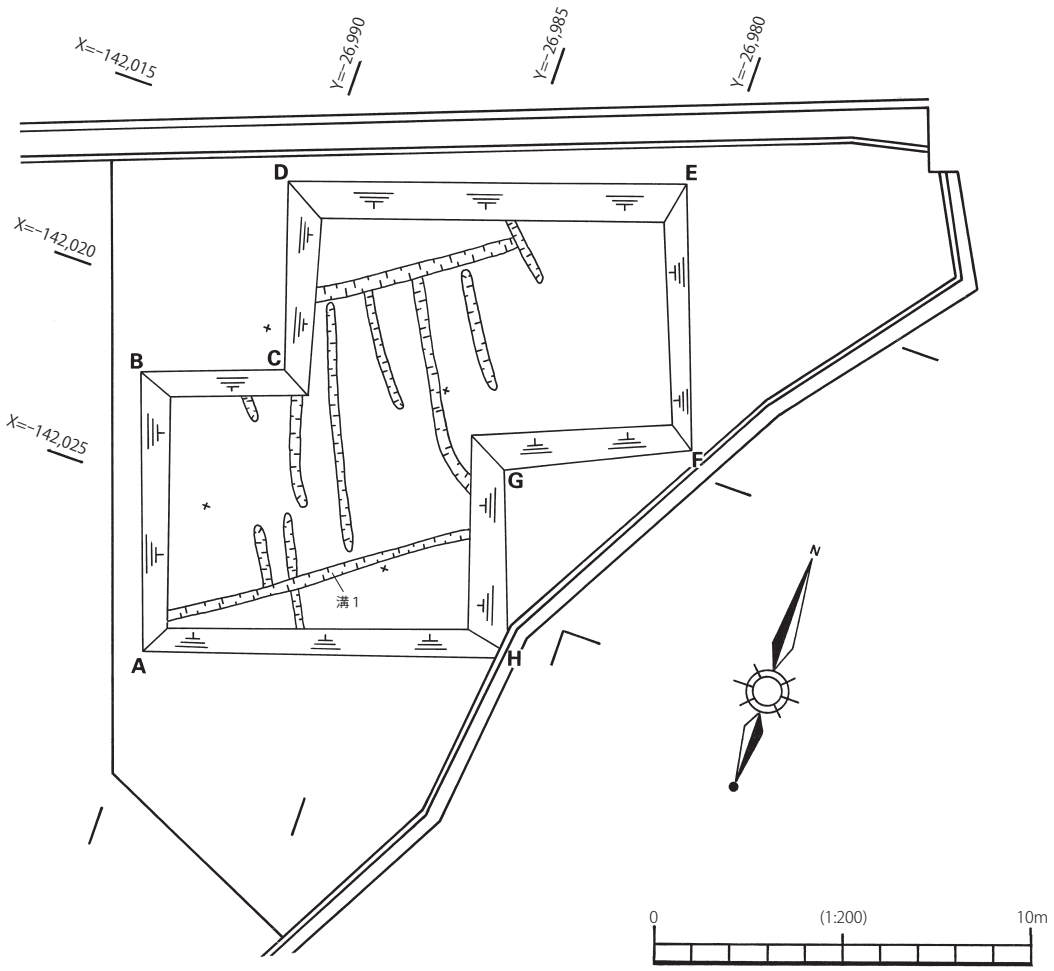
２．検出遺構

第１遺構面（第６・13 図、写真図版７－２・８－１）

第１遺構面は、厚さ約 40～50 ㎝の耕土および床土の下層で検出した。遺構面は T.P.+142.0ｍ付近の高さに存在し、検出した遺構は暗渠排水溝及び鋤溝である。1991-1 次調査第１遺構面と対応する可能性がある。また大阪府 1992 年度調査第１遺構面（奥編 1993）と対応するとみられる。

隣接地において､大阪府教育委員会が 10 本確認しているものと同じ溝を今回の調査区では１本検出した。溝１と呼んでいるこの溝は幅約 30 ㎝で、北東から南西の方向に長さ約 8.3ｍ確認した。溝の掘り方内には細い竹が数本入れられており、湿田のための排水施設であったと思われる。

他の９本の溝に関しては、北西から南東方向にほぼ等間隔に掘られており、鋤溝であると考えられ、遺構の切り合い関係から、暗渠排水溝以前のものである可能性が高い。また北端で溝１と同じ方向に掘られている溝内からは、竹などの埋設物を検出しなかったが、鋤溝との切り合い関係や掘られている方向から考えて、溝１と同じ性格のものであると思われる。



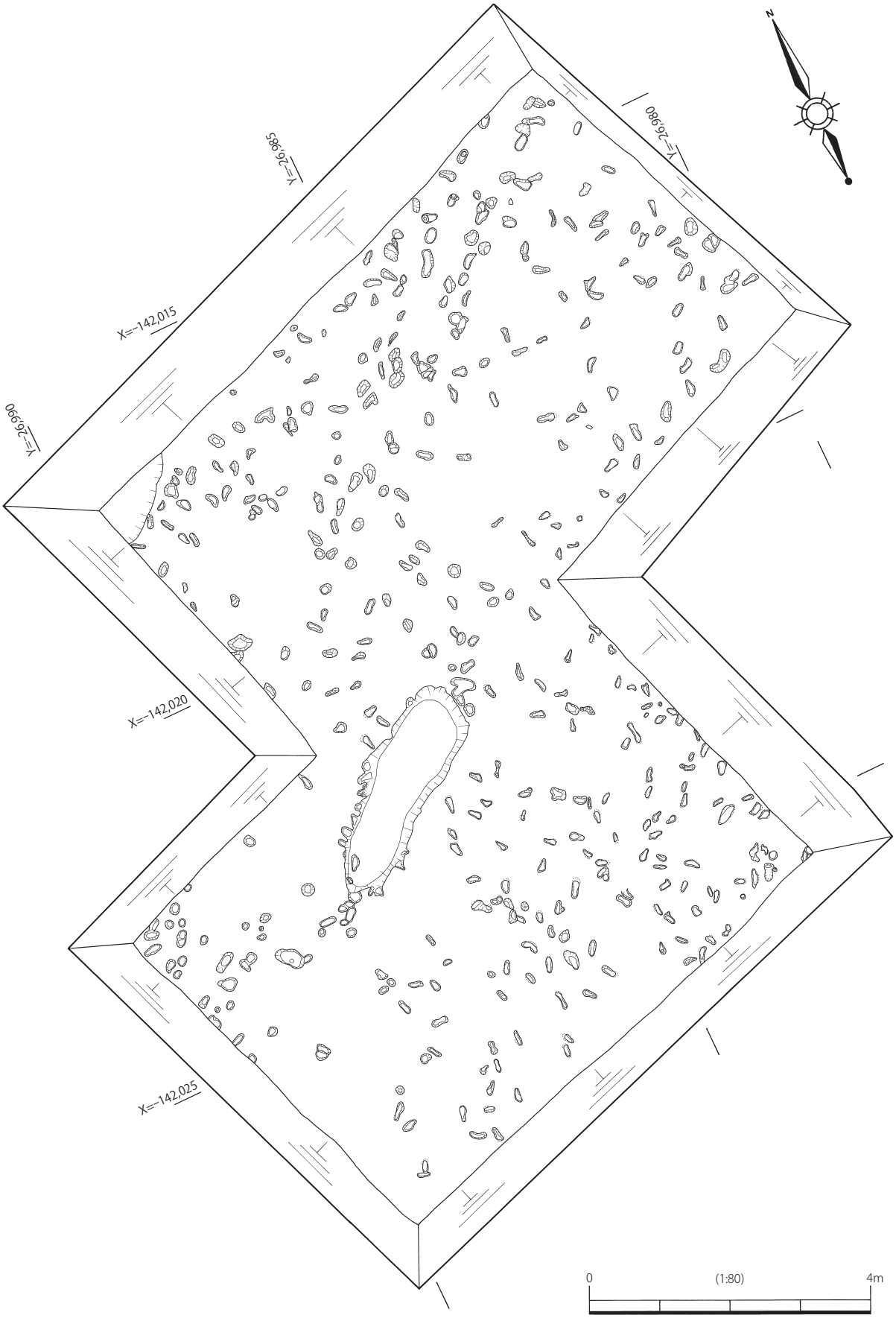
第６図　第１遺構面平面図（ＭＹ1994-１）

遺物は、溝１からは後世の流入によるものと思われる土師器羽釜片１点（第 13 図－34、写真図版 16－２－34）と遺構面を精査している際に肥前陶器碗片１点（第 13 図－29、写真図版 16－２－29）が出土している。これらから、第１遺構面は 17 世紀後半～18 世紀前半の遺構面とみられる。

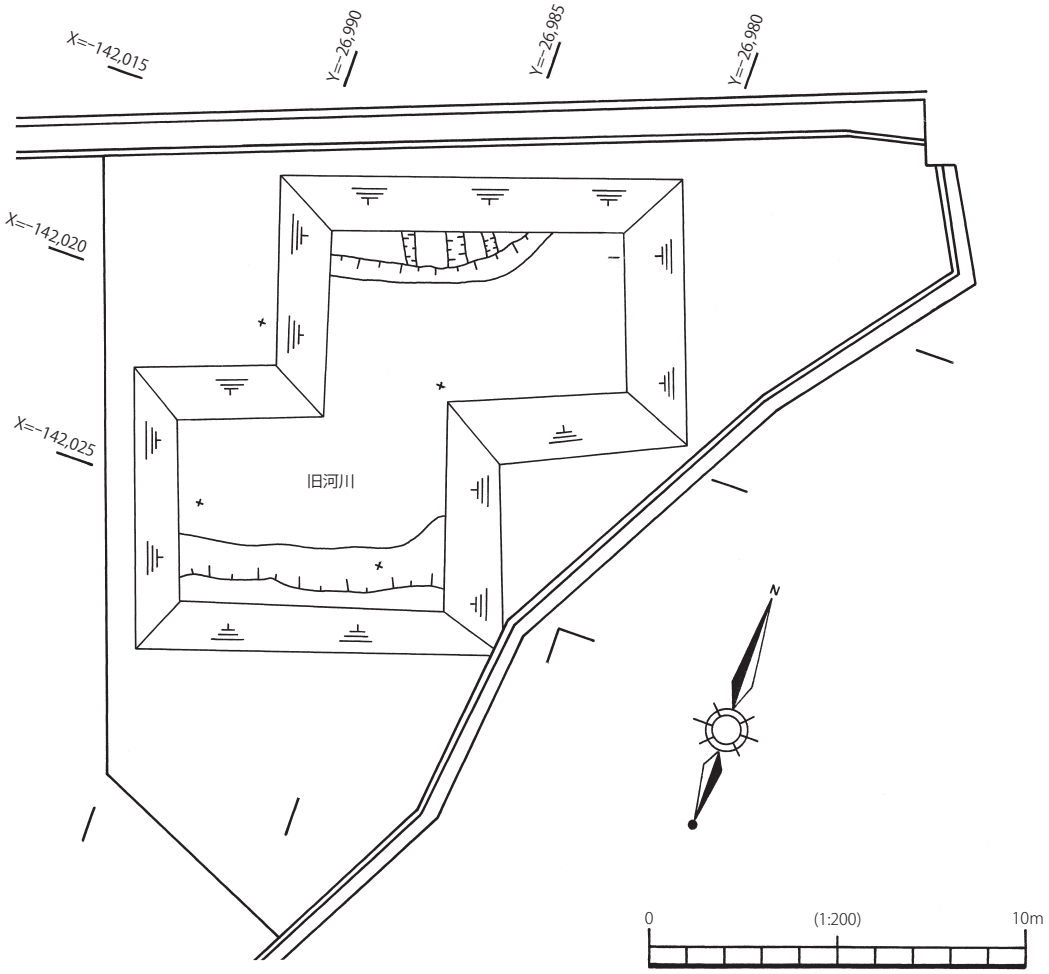
第２遺構面（第７・13 図、巻頭写真図版２－１、写真図版８－２・９－１・２）

第２遺構面は、T. P. +142. 000ｍの基本層序第Ｖ層上面で検出した。遺構面のベースは青灰色粘土層で、全体が水平な面に造成されており、全面に灰白色の砂で埋まった足跡が多数みられた。これらのことから、水田面であると判断した。これらの足跡には確実に人の足跡であるとわかるものと、円形のものとの２種類がみられた。この円形のものは、おそらく耕作に使った動物（牛？）の足跡であると考える。これらの足跡の方向は一定ではなかったことから、歩行の状況はつかめなかった。また、今回の調査範囲のなかでは畦畔を確認しなかったため、１枚の水田の一部であると考える。大阪府 1992 年度調査第２もしくは第３遺構面（奥編 1993）と対応するとみられる。

遺物は、遺構を精査している際に肥前陶器皿片１点（第 13 図－32、写真図版 16－２－32）と肥前青磁碗片１点（第 13 図－28、写真図版 16－２－28）が出土している。これらから、第２遺構面の年代は 17 世紀前半とみられる。



第７図　第２遺構面平面図（ＭＹ1994-１）



第８図　第３遺構面平面図（ＭＹ1994-１）

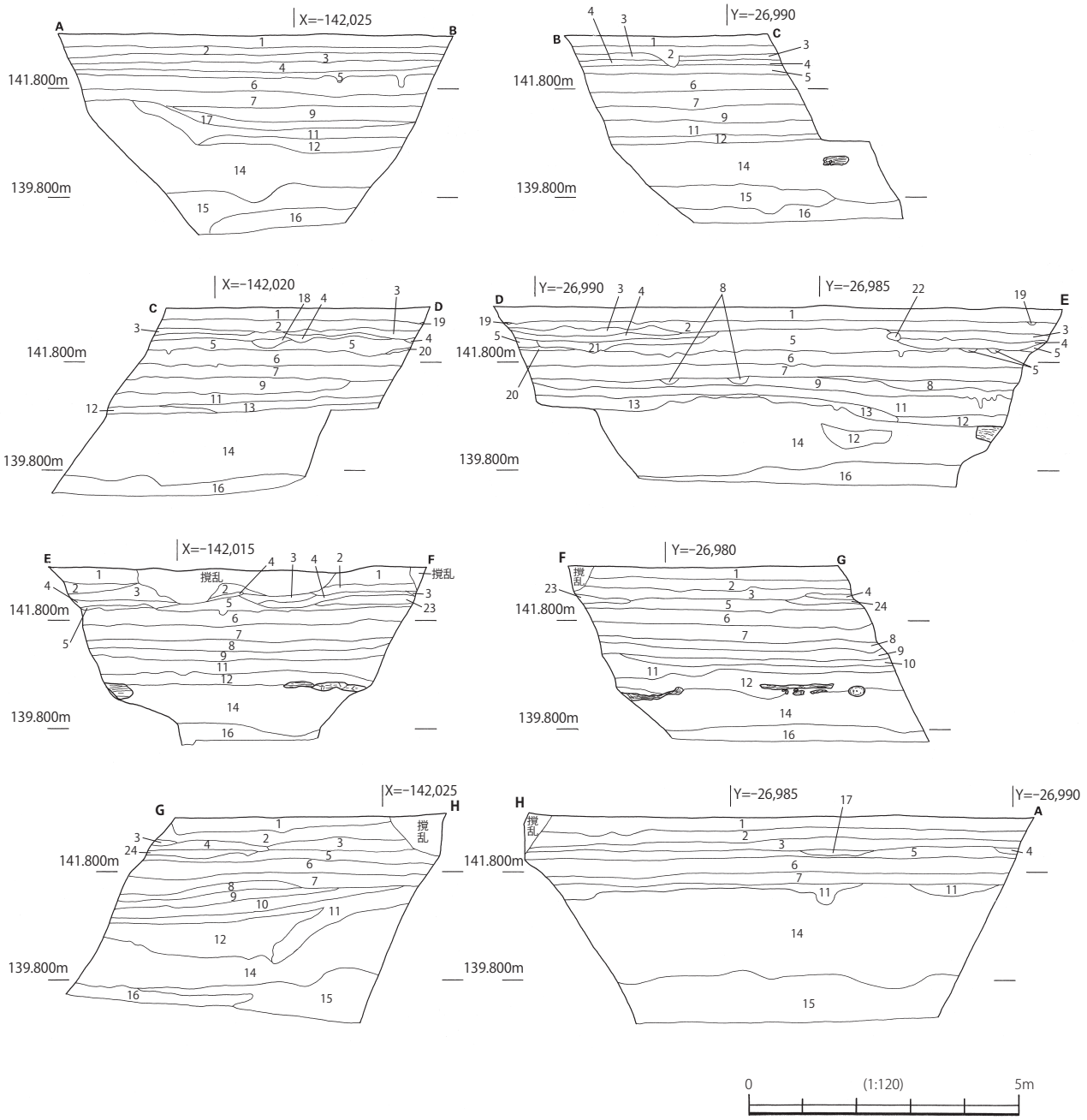
第３遺構面（第８・13 図、写真図版 10－１）

第３遺構面は、T.P.+141.500m前後の基本層序第Ⅷ層上面で検出した。この遺構面では、最大幅約8.6m・深さ約 60～100 ㎝を測る河川状の遺構を確認した。これは調査区内をほぼ東西方向に横切っているが、北側で検出した肩部の形状から考えると、北に向かって緩やかに曲がっていく可能性も考えられる。遺構内の堆積土は、上層の約 60 ㎝が緑灰色を基調とする粘土層で、下層の約 40 ㎝が暗灰色の腐植土を含むシルト層であった。以上の状況などから考えるとこの河川状の遺構は、人為的なものではなく旧天野川の一部であるか、またはその支流ではないかと推察される。

遺物は、遺構面を精査している際に貿易磁器青花碗片１点（第 13 図－31、写真図版 16－２－31）・肥前鉄釉陶器碗１点（第 13 図－30、写真図版 16－２－30）・土師器皿片１点（第 13 図－33）が出土し、旧河川内からは石鏃が４点（第 13 図－47～50、写真図版 18－１－47～50）出土している。遺構面精査時の出土遺物から、遺構面自体の年代は 16 世紀後半とみられる。

この遺構面の下層には、地山まで厚さ約 60～200 ㎝の遺物包含層が存在し（第９図、写真図版 10－２）、多数の縄文土器片（その内図示できたもの第 13 図－35～46、写真図版 17－１・２－35～46）・石鏃６点（第 13 図－51～56、写真図版 18－１－51～56）・有舌尖頭器１点（第 13 図－57、写真図版 18－１－57）・磨石１点（第 13 図－58、写真図版 18－２－58）などが出土している。

（村上）



第９図　調査地区断面図（ＭＹ1994-１）

第１層	耕土　黒褐色砂質土	(10YR 2/3)	第 13 層	オリーブ灰色シルト	(5GY 6/1)
第２層	床土　明褐色粗砂	(10YR 7/6)	第 14 層	浅黄橙色粗砂	(10YR 8/4)
第３層	にぶい黄橙色中砂	(10YR 6/4)	第 15 層	褐灰色粗砂	(10YR 4/1)
第４層	黄灰色細砂	(2.5Y 6/1)	第 16 層	淡黄色粘土	(5Y 8/4)
第５層	灰白色粗砂	(5Y 8/1)	第 17 層	緑灰色粘土	(7.5GY 5/1)
第６層	青灰色粘土	(10BG 5/1)	第 18 層	オリーブ灰色粗砂	(5GY 5/1)
第７層	灰色粘土	(N 4/)	第 19 層	灰白色粗砂	(N 7/)
第８層	灰色砂質土	(7.5Y 5/1)	第 20 層	灰色粗砂	(N 5/)
第９層	暗緑灰色粘土	(10GY 4/1)	第 21 層	暗オリーブ灰色粗砂	(2.5GY 4/1)
第 10 層	青灰色粘土	(5BG 6/1)	第 22 層	２層のブロック	
第 11 層	緑灰色粘土	(7.5GY 6/1)	第 23 層	明緑灰色シルト	(5G 7/1)
第 12 層	暗灰色シルト	(N 3/)	第 24 層	灰白色粗砂	(7.5Y 7/1)

第５節　1994-2 次調査

１．基本層序

発掘調査地区の調査前現況は、水田地であった。地表面からおよそ 0.2mは耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。

床土の下層に 0.2mほど中世～近世の遺物包含層が堆積し､その下面の T.P.＋147.200m付近が中世～近世の耕作遺構を中心とした第１遺構面であった。その下層には 0.3mほど中世の遺物包含層が堆積し、その下面の T.P.＋146.900m付近が中世の集落面である第２遺構面であった。その下層は淡黄色～黄橙色の細砂層が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第 10 図)。

２．検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに中世から近世に属するもので､Pit、土坑､溝があった (第 10 図)。遺構面の標高は、第１遺構面北東端で T.P.＋147.142m、北西端で T.P.＋147.242m、南東端で T.P.＋147.118m、南西端で T.P.＋147.212m、第２遺構面は北東端で T.P.＋146.975m、北西端で T.P.＋146.959m、南東端で T.P.＋146.923m、南西端で T.P.＋146.940mであった。出土遺物からは、第２遺構面は 15 世紀中ごろであり、第１遺構面はそれよりやや新しい時期とみられる。遺構の番号は、遺物が出土した遺構のみ、その種類ごとの検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構を中心に詳述する。

【第１遺構面】

Pit１　調査地区南端西寄りで検出した（第 10 図)。直径約 0.3mでいびつな円形を呈する。深さは約 0.2mである。上端の標高は T.P.＋147.048m、下端は T.P.＋146.886mであった。土師器羽釜小片、瓦器碗小片などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

溝２　調査地区南端の中央やや東寄りで検出した。北から南へと向いた直線的な溝で、両端は調査地区外に伸びる。ただし北端は途中で削平されたとみられ、その北側の調査地区では検出できなかった。検出できた規模は長さ 3.3m、幅 0.25m、深さは約 0.1mである。標高は北端部分の東側上端が T.P.＋147.092m、西側上端が T.P.＋147.086m、底部が T.P.＋147.055mで、南端部分の東側上端は T.P.＋147.097m、西側上端は T.P.＋147.083m、底部は T.P.＋147.041mであった（第 10 図)。青磁碗（第 14 図－62、写真図版 19－１－62)、土師器皿小片などが出土した。出土遺物から中世の遺構の可能性があり、耕作に伴う鋤溝遺構と考える。

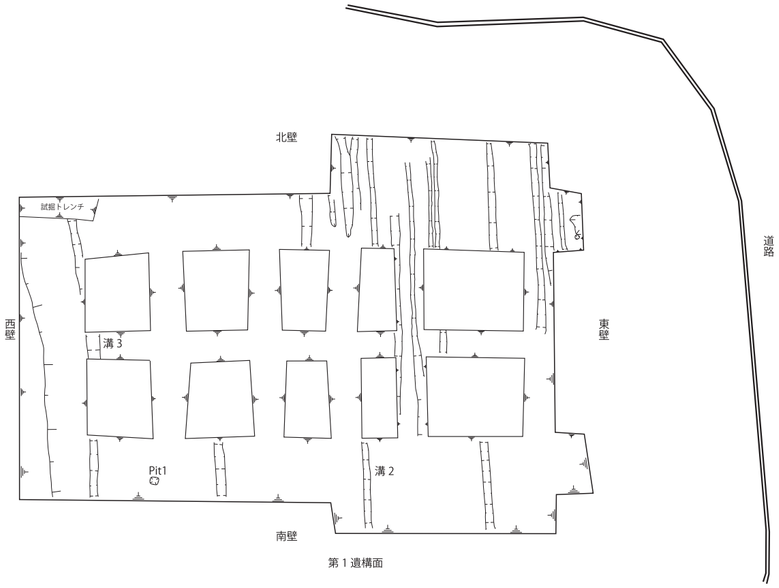
溝３　調査地区西端で検出した。北から南へと向いた直線的な溝で、両端は調査地区外に伸びる。検出できた規模は長さ 11.0m、幅 0.5m、深さは約 0.2mである。標高は北端部分の東側上端が T.P.＋147.137m、西側上端は T.P.＋147.173m、底部が T.P.＋147.051mで、中央部分の東側上端は T.P.＋147.169m、西側上端が T.P.＋147.192m、底部は T.P.＋147.031m、南端部分の東側上端が T.P.＋147.093m、西側上端は T.P.＋147.106m、底部が T.P.＋147.032mであった（第 10 図)。土師器皿小片が出土した。出土遺物から中世の遺構の可能性がある。

【第２遺構面】

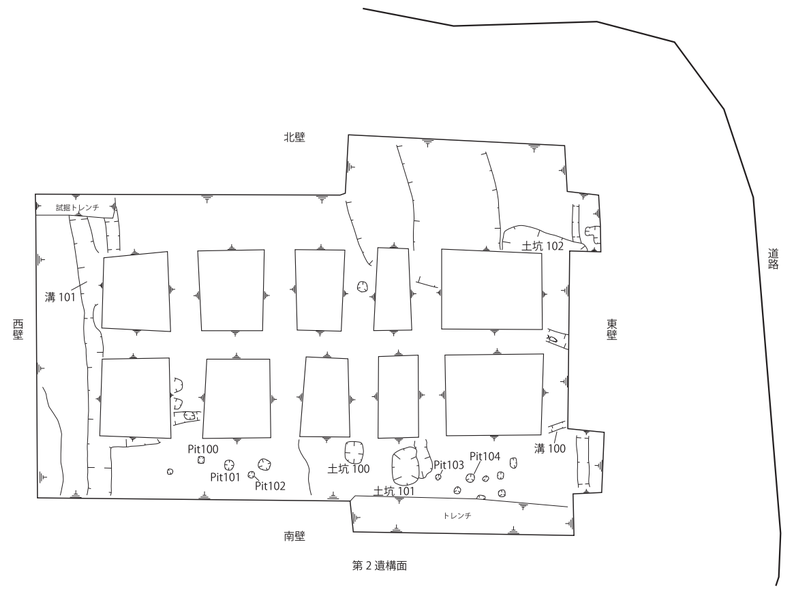
Pit100　調査地区南端西寄りで検出した（第 10 図)。直径 0.25mでいびつな円形を呈する。深さは約 0.2mである。上端の標高は T.P.＋146.957m、下端は T.P.＋146.717mであった。土師器皿小片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

Pit101　調査地区南端西寄りで検出した（第 10 図)。直径 0.25mでいびつな円形を呈する。深さは約 0.2mである。上端の標高は T.P.＋146.932m、下端は T.P.＋146.705mであった。瓦器碗小片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

Pit102　調査地区南端西寄りで検出した（第 10 図)。直径約 0.2mで円形を呈する。深さは約 0.2mである。上端の標高は T.P.＋146.814m、下端は T.P.＋146.626mであった。瓦器碗（第 14 図－63、写真図版 19－２－63）などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

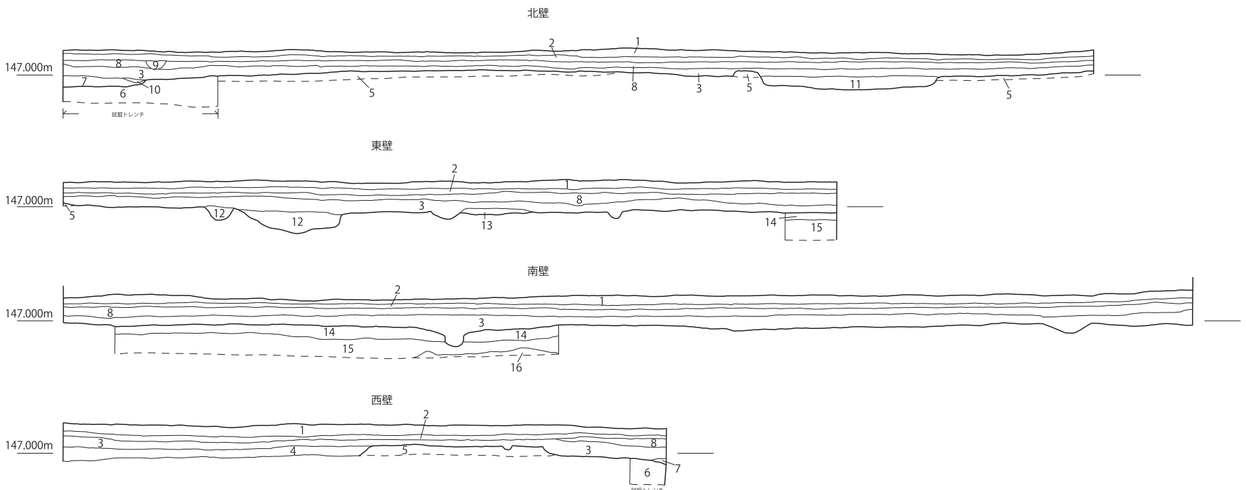


第 1 遺構面



第 2 遺構面

0 (1:200) 10m



1　耕土
2　床土
3　灰色砂質土　7.5Y 6/1　中世包含層
4　灰褐色砂質土　5YR 4/2　中世包含層
5　黄橙色細砂層　10YR 8/8
6　淡黄色細砂層　7.5Y 8/3
7　灰黄褐色砂質土　10YR 4/2
8　明赤褐色砂質土　5YR 5/8　床土？
9　灰色砂質土　N 6/
10　5 層に炭化物が混じっている
11　暗褐色砂質土　10YR 3/4
12　褐灰色砂質土　10YR 4/1
13　にぶい黄橙色粘質土　10YR 7/3
14　褐灰色砂質土　10YR 4/1
15　褐色粘質土　10YR 4/4
16　褐灰色粗砂層　10YR 4/1

0 (1:100) 5m

第 10 図　調査地区平面図・断面図（ＭＹ1994-２）

Pit103　調査地区南端東寄りで検出した（第 10 図）。直径約 0.2mでいびつな円形を呈する。深さは約 0.15mである。上端の標高は T.P.＋146.889m、下端は T.P.＋146.742mであった。土師器皿小片などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

Pit104　調査地区南端東寄りで検出した（第 10 図）。直径約 0.3mで円形を呈する。深さは約 0.2mである。上端の標高は T.P.＋146.901m、下端は T.P.＋146.711mであった。土師器小片が出土した。出土遺物から中世の遺構の可能性がある。

土坑 100　調査地区南端中央で検出した。南北約 0.9m、東西約 0.8m、深さ約 0.1mで隅丸方形を呈する。上端の標高は T.P.＋146.908m、底部は T.P.＋146.819mであった（第 10 図）。瓦器碗小片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

土坑 101　調査地区南端中央東寄りで検出した。南北約 1.45m、東西約 1.0m、深さ約 0.1mで隅丸不整方形の遺構である。上端の標高は T.P.＋146.912m、底部は T.P.＋146.852mであった（第 10 図）。土師器皿小片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

土坑 102　調査地区北東端で検出した。東西約 3.3m、深さ約 0.3mで不整円形の遺構である。遺構の一部は調査地区外であり、遺構掘形の一部は検出できていない。上端の標高は遺構東端で T.P.＋146.954m、西端で T.P.＋146.946m、底部は T.P.＋146.636mであった（第 10 図、写真図版 13－２）。青磁碗（第 14 図－69、写真図版 19－２－69）、土師器片、焼壁土片、国産陶器片などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

溝 100　調査地区東端のやや南寄りで検出した。西から東へと向いた直線的な溝で、両端は調査地区外に伸びる。ただし西端は途中で削平されたとみられ、その西側の調査地区ではこの溝を検出することができなかった。検出できた規模は長さ 1.1m、幅 0.23m、深さは約 0.1mである。標高は西端部分の北側上端が T.P.＋146.884m、南側上端が T.P.＋146.898m、底部が T.P.＋146.836mで、東端部分の北側上端は T.P.＋146.891m、南側上端は T.P.＋146.926m、底部は T.P.＋146.831mであった（第 10 図）。瓦器碗（第 14 図－64、写真図版 19－２－64）などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

溝 101　調査地区西端で検出した。北から南へと向いた直線的な溝で、両端は調査地区外に伸びる。検出できた規模は長さ 10.8m、幅 0.7m、深さは約 0.25mである。標高は北端部分の東側上端が T.P.＋146.960m、西側上端は T.P.＋146.959m、底部が T.P.＋146.801mで、中央部分の東側上端は T.P.＋146.889m、西側上端が T.P.＋146.905m、底部は T.P.＋146.651m、南端部分の東側上端が T.P.＋146.930m、西側上端は T.P.＋146.923m、底部が T.P.＋146.754mであった（第 10 図）。土師器皿（第 14 図－65、写真図版 19－２－65）、青磁端反碗（第 14 図－66、写真図版 19－２－66）、瓦質土器擂鉢（第 14 図－67、写真図版 19－２－67）、平瓦（第 14 図－68、写真図版 19－２－68）などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

（實盛）

第６節　出土遺物

１．1992-1 次調査

【遺物包含層内出土遺物】

土師器

１甕　口径：10.0 ㎝。器高：10.7 ㎝。厚さ：0.3～0.5 ㎝。色調：内・外面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の白色砂粒・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁端部の内外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、体部内面はヨコハケ調整を施している。５世紀後半のものと思われる。調査地区西端の側溝内出土。（第 11 図－１、写真図版 14－１－１）

２甕　口径：9.8 ㎝。器高：11.6 ㎝。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：内・外面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径 1㎜以下の白色砂粒・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整後にナデ調整、体部内面は粗いナデ調整を施している。体部内面には幅約３㎝の粘土紐痕がみられる。６世紀前半のものと思われる。側溝内出土。（第 11 図－２、写真図版 14－１－２）

３皿　口径：8.0 ㎝。器高：1.5 ㎝。厚さ：0.2～0.7 ㎝。色調：内・外面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁部は強いヨコナデ調整後に端部を再度ヨコナデ調整して面取りを施している。体部内外面はナデ調整を施している。Jb タイプの 13 世紀後半のものと思われる。No.20 地区出土。（第 11 図－３、写真図版 14－１－３）

須恵器

４壺　口径：8.7 ㎝。器高：17.4 ㎝。高台径：9.0 ㎝。高台高：0.8 ㎝。厚さ：0.3～0.9 ㎝。色調：内外面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形（口縁部の一部欠損）。口頸部は緩やかに外上方に広がりながら、端部がやや外反している。体部は中位で最大径をもつ楕円形を呈する。高台部はハの字状を呈する断面方形の比較的高いものを付している。口縁部内面と体部外面の肩部に自然釉がみられ、肩部には他製品との融着痕がみられる。Ⅳ型式２段階（平城Ⅲ）。８世紀中頃のものと思われる。No.20 地区出土。（第 11 図－４、写真図版 14－１－４）

鉄製品

５鎌　刃部の長さ：10.7 ㎝（残存）。幅：0.6～3.3 ㎝。厚さ：0.2～0.6 ㎝。茎部の長さ：4.9 ㎝（残存）。幅：1.2～2.3 ㎝（残存）。厚さ：0.4 ㎝。刃部の先端と茎部の先端が欠損している。中世以降のものと思われる。No.18 地区出土。（第 11 図－５、写真図版 14－２－５）

６鎌　刃部の長さ：12.2 ㎝。幅：0.6～3.0 ㎝。厚さ：0.1～0.3 ㎝。茎部の長さ：6.0 ㎝。幅：0.4～2.0 ㎝。厚さ：0.3 ㎝。茎部の先端は、柄に装着した際に固定を確実にするため若干内側に曲げている。中世以降のものと思われる。No.18 地区出土。（第 11 図－６、写真図版 14－２－６）

７釘　長さ：15.2 ㎝。幅：0.3～1.5 ㎝。厚さ：0.3～0.8 ㎝。断面は長方形を呈する。中世以降のものと思われる。No.18 地区出土。（第 11 図－７、写真図版 14－２－７）

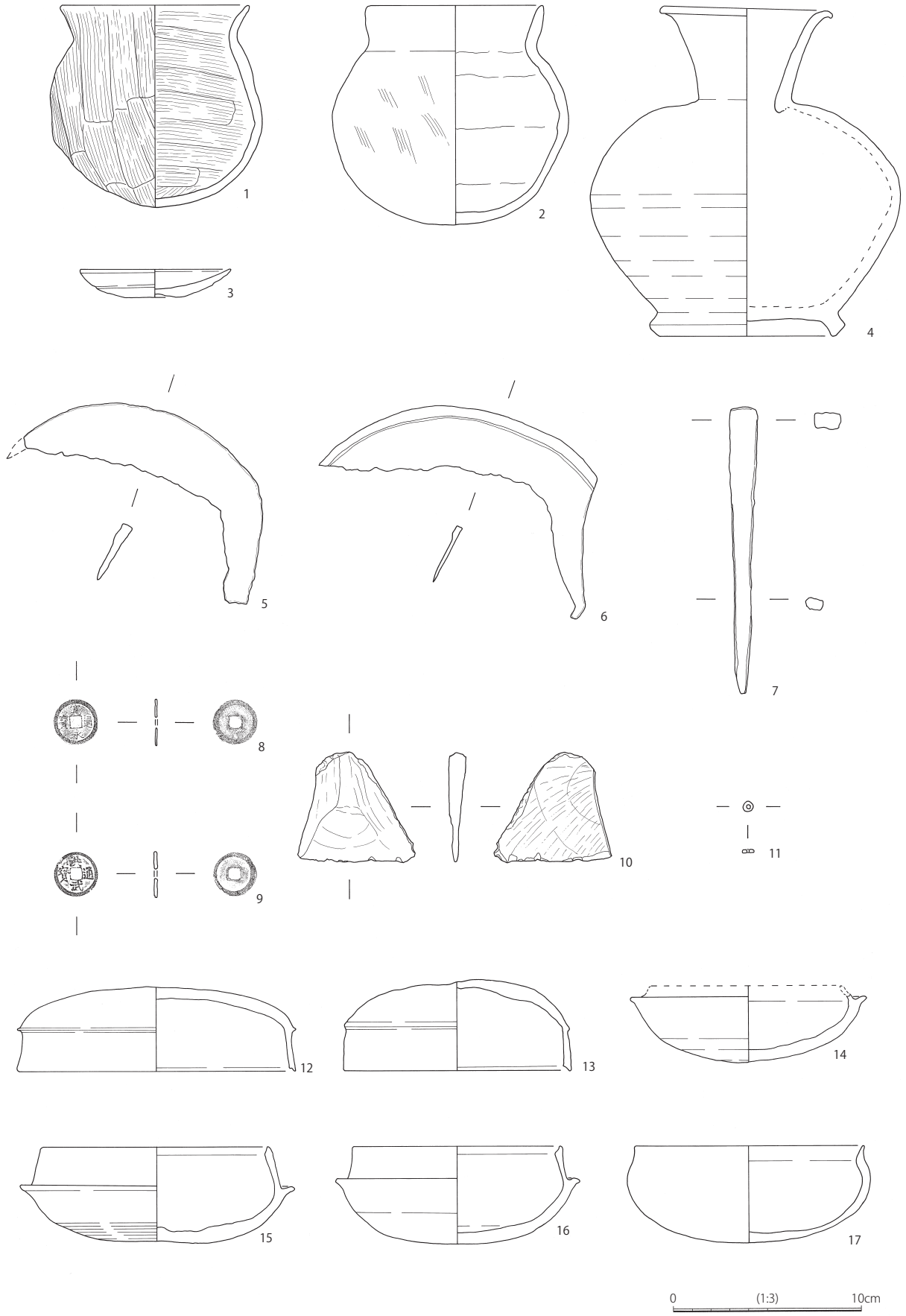
銅銭

８寛永通寶　直径：2.5 ㎝。厚さ：0.1 ㎝。寛文８年（1668）以降に鋳造された新寛永通寶。No.17 地区出土。（第 11 図－８、写真図版 14－２－８）

９洪武通寶　直径:2.4 ㎝。厚さ：0.2 ㎝。明朝銭は 1368 年初鋳であるが、模造銭の可能性がある。No.16 地区出土。（第 11 図－９、写真図版 14－２－９）

石器

10 削器　長さ：5.8 ㎝。最大幅：6.3 ㎝。厚さ：0.2～0.9 ㎝。色調：灰色（N 5/）。サヌカイト製で、二上山産と思われる。片側だけを刃部とする削器（サイドスクレイパー）である。No.18 地区出土。（第 11 図－10、写真図版 14－２－10）



第11図　出土遺物（ＭＹ1992-１・ＭＹ1993-１）

２．1993-1 次調査

【遺物包含層内出土遺物】

石製品

11 臼玉　直径：0.5 ㎝。厚さ：0.2 ㎝。残存度：完形。滑石製品である。（第 11 図－11、写真図版 16－１－11）

須恵器

12 坏蓋　口径:14.8 ㎝(復元)。器高：4.5 ㎝。厚さ：0.3～0.7 ㎝。色調：内･外面は灰色(N 7/)。胎土：やや粗。直径２㎜ 以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。天井部には稜線がみられ、口縁部は内傾し、端部に段をもつ。天井部外面の 1/2 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式１段階（MT15 型式)。６世紀前半のものと思われる。（第 11 図－12、写真図版 15－１－12）

13 坏蓋　口径:12.0 ㎝。器高：4.7 ㎝。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：内･外面は灰色(N 7/)。胎土：やや粗。直径２㎜ 以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：2/3。天井部には稜線がみられ、口縁部は内傾し、端部に段をもつ。天井部外面の 2/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式１段階（MT15 型式)。６世紀前半のものと思われる。（第 11 図－13、写真図版 15－１－13）

14 坏身　器高：3.6 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.6 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/)、断面は灰白色（N 7/)、外面と断面の一部はにぶい橙色（5YR 6/3)。胎土：やや粗。直径３㎜ 以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：1/3。体部外面の 2/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。（第 11 図－14、写真図版 15－１－14）

15 坏身　口径:12.2 ㎝。器高：5.0 ㎝。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：内･外面は灰色(N 6/)。胎土：やや密。直径１㎜ 以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁部は内傾し、端部に段をもつ。体部外面の下部 2/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式１段階（MT15 型式)。６世紀前半のものと思われる。（第 11 図－15 、写真図版 15－１－15 ）

16 坏身　口径：11.1 ㎝（復元）。器高：5.2 ㎝。厚さ：0.2～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 5/）。胎土：やや密。直径１㎜ 以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部は内傾し、端部に段をもつ。体部外面の下部 2/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式１段階（MT15 型式)。６世紀前半のものと思われる。（第 11 図－16　、写真図版 15－１－16 ）

土師器

17 鉢　口径:12.2 ㎝。器高：5.1 ㎝。厚さ：0.2～0.5 ㎝。口縁端部はヨコナデ調整によりやや外反している。６世紀中頃のものと思われる。（第 11 図－17）

18 甕　器高：8.3 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：内・外面はにぶい橙色（7.5Y 7/4）。胎土：やや密。直径１㎜ 以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：口縁部のみ欠損。体部外面は粗いタテハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。５世紀前半のものと思われる。（第 12 図－18、写真図版 15－２－18）

19 長胴甕　口径：27.0 ㎝（復元)。器高：7.8 ㎝（残存）。厚さ：0.5～1.0 ㎝。残存度：小片。体部外面はタテハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。６世紀前半のものと思われる。（第 12 図－19）

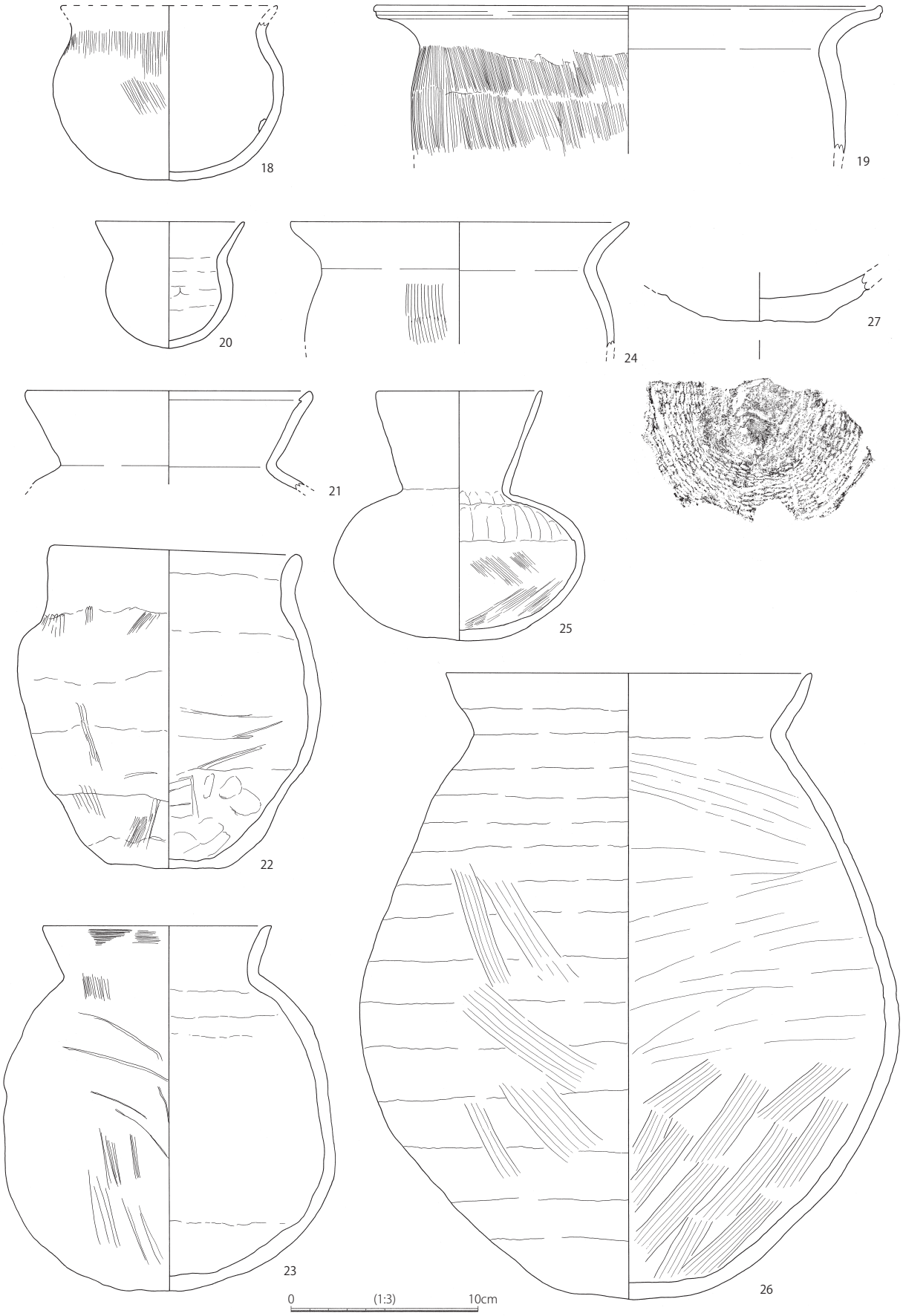
20 小型壺　口径：8.0 ㎝（復元)。器高：6.7 ㎝。厚さ：0.2～0.8 ㎝。残存度：小片。体部内・外面はナデ調整、体部内面に粘土紐痕と指頭痕がみられる。５世紀前半のものと思われる。（第 12 図－20）

21 甕　口径：15.0 ㎝（復元)。器高：5.2 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.6 ㎝。残存度：小片。布留式系甕。５世紀前半のものと思われる。（第 12 図－21）

22 甕　口径：13.0 ㎝。器高：17.0 ㎝。厚さ：0.4～0.9 ㎝。体部外面はタテハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。底部内面に指頭痕がみられる。体部内外面ともに粘土紐痕が明瞭にみられる。（第 12 図－22）

23 甕　口径：12.2 ㎝。器高：19.4 ㎝。厚さ：0.5～0.8 ㎝。体部外面はタテハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。（第 12 図－23）

24 甕　口径：18.0 ㎝（復元)。器高：6.5 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.6 ㎝。残存度：小片。体部外



第12図　出土遺物（ＭＹ1993-１）

面はタテハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。（第 12 図－24）

25 壺　口径：8.8 ㎝。器高：13.3 ㎝。厚さ：0.3～0.7 ㎝。体部内面の頸部付近にユビナデ調整を施している。５世紀前半～中頃のものと思われる。（第 12 図－25、写真図版 15－２－25）

26 甕　口径：19.5 ㎝。器高：33.4 ㎝。厚さ：0.3～0.9 ㎝。色調：内・外面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面は粗いタテハケ調整後に粗いナデ調整、体部内面は粗いヘラケズリ調整、底部内面付近はタテハケ調整を施している。体部外面には粘土紐痕が明瞭にみられる。６世紀前半のものと思われる。（第５・12 図－26、写真図版 15－２－26）

27 籠目土器　器高：2.6 ㎝。厚さ：0.8～1.5 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（2.5Y 8/2）。外面に黒斑がみられる。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の白色砂粒・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。底部内面はナデ調整を施している。底部外面には籠目痕がみられる。（第 12 図－27、写真図版 16－１－27）

３．1994-1 次調査

陶磁器

28 肥前青磁碗　高台径：3.8 ㎝（復元）。器高：2.1 ㎝（残存）。厚さ：0.4～1.0 ㎝。色調：内・外面は明緑灰色（7.5GY 7/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。畳付以外全面に青磁釉を施している。畳付に砂粒がみられる。大橋氏分類によるⅡ－２期のものである。1630～1650 年のものと思われる。（第 13 図－28、写真図版 16－２－28）。第２遺構面遺物包含層出土。

29 肥前陶器碗　高台径：5.0 ㎝（復元）。器高：4.5 ㎝（残存）。厚さ：0.4～1.1 ㎝。色調：内面は灰白色（10Y 7/1）、断面と露胎部は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に銅呈色の緑釉、内面に透明釉を施した碗で、高台は無釉である。青緑釉陶器と呼ばれている嬉野町内野山窯の製品で、大橋氏分類によるⅣ期の前半のものである。17 世紀後半～18 世紀前半のものと思われる。（第 13 図－29、写真図版 16－２－29）。第１遺構面遺物包含層出土。

30 肥前鉄釉陶器碗　器高：4.8 ㎝(残存)。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内･外面は黒褐色(10YR 2/3)、断面は灰白色（10YR 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面に飴色釉を施している。内外面に細かい貫入がみられる。17 世紀代のものと思われる。（第 13 図－30、写真図版 16－２－30）。第３遺構面遺物包含層出土。

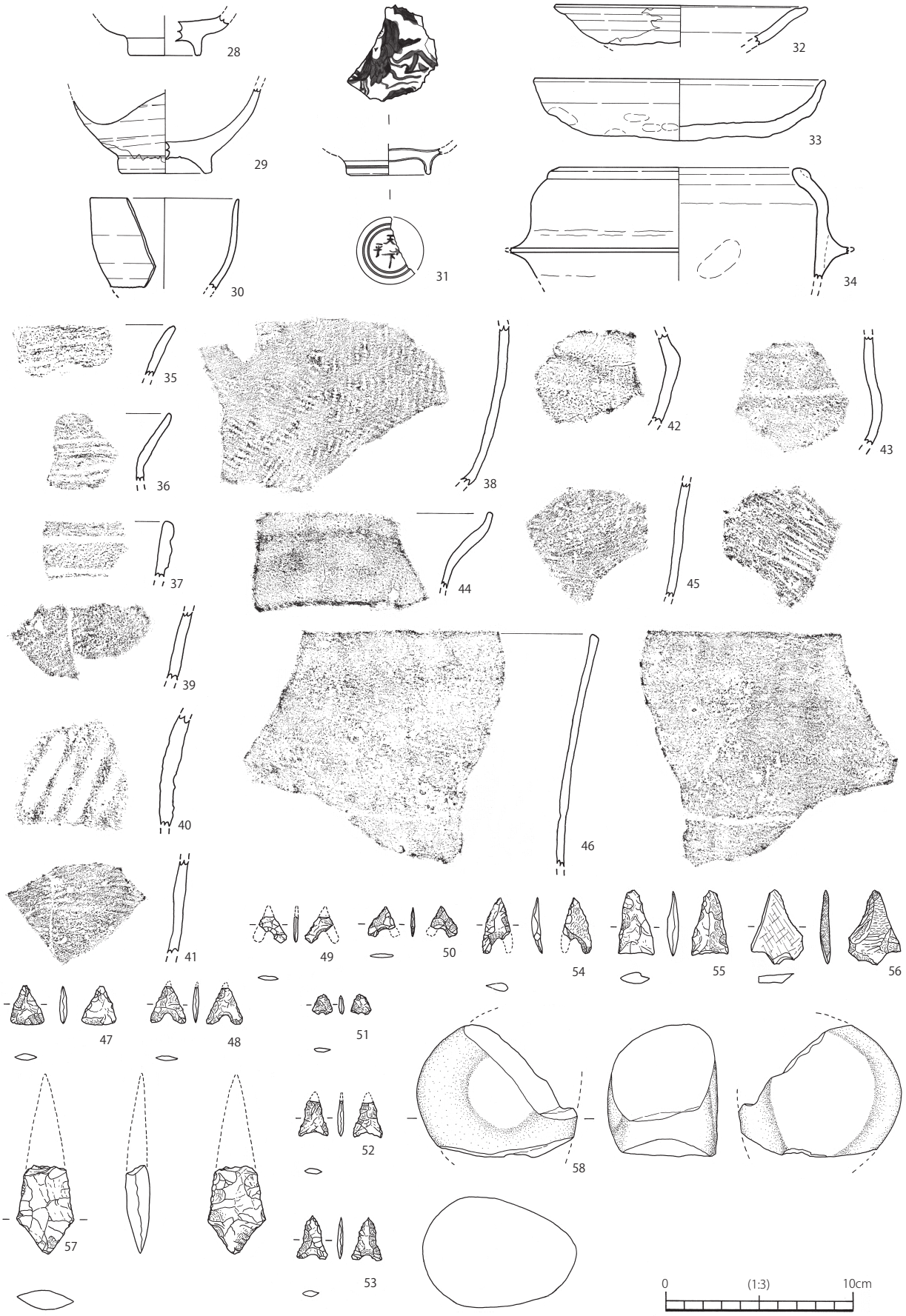
31 貿易磁器青花碗　高台径：4.4 ㎝（復元）。器高：2.2 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.6 ㎝。色調：内・外面は明オリーブ灰色（2.5GY 7/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。景徳鎮窯系の饅頭心の底部をもつ碗で、畳付の釉は掻き取っている。高台外面には２本の線が、高台裏には二重の同心円の中に「天下太平」の字款が描かれている。また見込みには仙人と思われる絵が描かれている。呉須はやや黒味がかった色を呈している。16 世紀後半のものと思われる。（第 13 図－31、写真図版 16－２－31）。第３遺構面遺物包含層出土。

32 肥前陶器皿　口径：13.4 ㎝（復元）。器高：2.1 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.5 ㎝。色調：内・外面は灰白色（7.5Y 7/2）、断面と露胎部は灰白色（5Y 8/2 ）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部内面に小さな段をもち、口縁部をわずかに外反させ口縁部上面に溝状の窪みを設けた灰釉溝縁皿と呼ばれているものである。内面全体と口縁部外面に灰釉を施している。大橋氏分類によるⅡ期のものである。1600～1630 年のものと思われる。（第 13 図－32、写真図版 16－２－32）。第２遺構面遺物包含層出土。

土師器

33 皿　口径：15.5 ㎝（復元）。器高 3.3 ㎝。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：内・外・断面は淡黄色（2.5Y 8/4）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。平底から口縁部に向かって 緩やかに立ち上がっているの中皿。外面には底部から口縁部との境目まで指頭痕がみられ、内面はナデ調整が、口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施されている。12 世紀代のものと思われる。（第 13 図－33）。第３遺構面遺物包含層出土。

34 羽釜　口径：12.8 ㎝（復元）、鍔部径 19.0 ㎝（復元）。器高 5.9 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.6



第13図　出土遺物（ＭＹ1994-１）

cm。色調：内・外面は浅黄橙色（10YR 8/4）、断面は黄灰色（2.5Y 5/1）。胎土：やや密。直径１mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部の張りは少なく、口縁部が内傾する。口縁端部は外側に短く折り返して丸く納めて肥厚している。鍔は水平に 1.4 cm伸び、下部には若干の煤の付着がみられる。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、鍔の接合部に対応する体部内面には楕円形の指頭痕がみられる。森島氏分類によるＤ型式と考える。14 世紀前半のものと思われる。溝１から出土しているが後世の混入品である。（第 13 図－34、写真図版 16－２－34）

縄文土器

35 口縁部片　厚さ：0.4～0.5 cm。色調：内・外・断面は灰黄褐色（10YR 6/2）。胎土：やや粗。直径１mm程度の白砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。後期後葉頃の精製深鉢と思われる。（第 13 図－35、写真図版 17－１－35）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

36 口縁部片　厚さ：0.4～0.5 cm。色調：内・外・断面は灰黄褐色（10YR 4/2）。胎土：やや密。直径１mm程度の白砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に条痕文を施す。後期後葉頃（宮滝式）の精製深鉢と思われる。（第 13 図－36、写真図版 17－１－36）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

37 口縁部片　厚さ：0.5～0.7 cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/4）。胎土：やや密。直径１mm程度の白砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に２条以上の直線的な沈線を巡らせて磨消縄文を施している。後期中葉～後葉頃（元住吉山式）の精製土器と思われる。（第 13 図－37、写真図版 17－１－37）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

38 体部片　厚さ：0.4～0.5 cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）。胎土：やや密。直径１mm程度の白砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。精製土器。（第 13 図－38、写真図版 17－１－38）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

39 体部片　厚さ：0.5～0.7 cm。色調：内・外・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/3）。胎土：やや密。直径１mm程度の白砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。精製土器。（第 13 図－39、写真図版 17－１－39）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

40 体部片　厚さ：0.6～0.9 cm。色調：内・断面はにぶい黄褐色（10YR 4/3）、外面は灰白色（10YR 8/1）。胎土：やや粗。直径１～３mm程度の白砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。（第 13 図－40、写真図版 17－１－40）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

41 体部片　厚さ：0.5～0.7 cm。色調：内・外・断面は黄褐色（10YR 5/6）。胎土：やや粗。直径１mm程度の白砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に条痕文を施す。（第 13 図－41、写真図版 17－２－41）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

42 体部片　厚さ：0.5～0.9 cm。色調：内面は黄褐色（10YR 5/6）、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）。胎土：やや粗。直径１mm程度の白砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内面はナデ調整を施す。粗製深鉢と思われる。（第 13 図－42、写真図版 17－２－42）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

43 体部片　厚さ：0.4～0.5 cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）。胎土：やや粗。直径１～３mm程度の白砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内面はナデ調整を施す。晩期前半頃（滋賀里式）の粗製深鉢と思われる。（第 13 図－43、写真図版 17－２－43）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

44 口縁部片　厚さ：0.4～0.6 cm。色調：内面は褐色（10YR 4/6）、外・断面は褐灰色（10YR 4/1）。胎土：やや粗。直径１～２mm程度の白砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。後期後葉～晩期の粗製深鉢と思われる。（第 13 図－44、写真図版 17－２－44）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

45 体部片　厚さ：0.4～0.5 cm。色調：内・外・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１～３mm程度の白砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面に条痕文を施す。（第 13 図－45、写真図版 17－２－45）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

46 口縁部片　厚さ：0.3～0.5 cm。色調：内・外・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/4）。内外面の一部は暗褐色（10YR 3/3）。胎土：やや粗。直径１～２mm程度の白砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はナデ調整、体部内面は条痕文を施している。後期後葉の粗製深鉢と思われ

る。（第 13 図－46、写真図版 17－２－46）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

打製石鏃

47 平基無茎式　最大長 22 ㎜（復元）・最大幅 18 ㎜・最大厚４㎜。平面形態は二等辺三角形に近い形で、石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－47、写真図版 18－１－47）。第３遺構面旧河川から出土。

48 凹基無茎式　最大長 23 ㎜（復元）・最大幅 19 ㎜・最大厚３㎜。平面形態は二等辺三角形に近い形で、基辺が５㎜半円状に抉りが入る。石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－48、写真図版 18－１－48）。第３遺構面旧河川から出土。

49 凹基無茎式　最大長 20 ㎜（復元）・最大幅（復元）18 ㎜・最大厚２㎜。平面形態は二等辺三角形に近い形で、基辺が７㎜半円状に抉りが入る。石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－49、写真図版 18－１－49）。第３遺構面旧河川から出土。

50 凹基無茎式　最大長 16 ㎜・最大幅 17 ㎜(復元)・最大厚２㎜。平面形態は正三角形に近い形で、基辺が４㎜半円状に抉りが入る。石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－50、写真図版 18－１－50）。第３遺構面旧河川から出土。

51 凹基無茎式　最大長 17 ㎜(復元)・最大厚２㎜。小破片であるため平面形態は不明確であるが、49・50 と同形態と思われる。石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－51、写真図版 18－１－51）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

52 凹基無茎式　最大長 24 ㎜（復元）・最大幅 16 ㎜・最大厚３㎜。平面形態は二等辺三角形に近い形であるが両側辺が若干凹み、基辺は２㎜弧状に凹んでいる。石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－52、写真図版 18－１－52）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

53 凹基無茎式　最大長 23 ㎜・最大幅 17 ㎜・最大厚３㎜。平面形態は二等辺三角形に近い形であるが両側辺が若干凹み、基辺は３㎜弧状に凹んでいる。石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－53、写真図版 18－１－53）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

54 凹基無茎式　最大長 30 ㎜・最大幅 16 ㎜(復元)・最大厚５㎜。側辺は基辺から先端に向かって、中央部付近で最大幅をもつように弧状を呈する。基辺は８㎜U字状に抉りが入る。石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－54、写真図版 18－１－54）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

55 平基無茎式　最大長 37 ㎜（復元）・最大幅 19 ㎜・最大厚６㎜。平面形態は二等辺三角形に近い形で、石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－55、写真図版 18－１－55）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

その他の石器

56 不定形刃器　最大長 40 ㎜・最大幅 28 ㎜・最大厚５㎜。石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－56、写真図版 18－１－56）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

57 有舌尖頭器（有茎尖頭器）　最大長（残存）47 ㎜・最大幅 30 ㎜・最大厚 13 ㎜。逆三角形の茎部を有する柳葉形尖頭器。石材はサヌカイトで、二上山産と思われる。（第 13 図－57、写真図版 18－１－57）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

58 磨石　最大長 70 ㎜（残存）・最大幅 83 ㎜（残存）・最大厚 59 ㎜。部分的に敲石として使用した痕跡がみられる。石材は砂岩である。（第 13 図－48、写真図版 18－２－58）。第３遺構面下の遺物包含層出土。

４．1994-2 次調査

【遺物包含層内出土遺物】

瓦器

59 碗　口径：13.2 ㎝（復元）。器高：2.0 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキは不明。体部内面はやや粗いヘラミガキ調整を施している。口縁部内端には段が確認できる。大和型Ⅲ－Ｂ～Ｃ段階。13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 14 図－59、写真図版 19－１－59）。

瓦質土器

60 風呂　口径：26.2 ㎝（復元）。器高：3.6 ㎝（残存）。厚さ：0.8～1.3 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい橙色(7.5YR 7/4)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。坪之内氏分類による風呂Ⅲ、菅原氏分類によるＥ型の胴部が球形のものと思われる。15 世紀代のものと思われる。(第 14 図－60、写真図版 19－１－60)。

瓦

61 平瓦　長さ：6.5 ㎝（残存)。幅：7.5 ㎝（残存)。厚さ：2.0 ㎝。色調：凹・凸面は灰色（N 4/)、断面は灰白色（N 8/)。胎土：やや粗。直径１㎜以下の砂粒・石英をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。(第 14 図－61、写真図版 19－１－61)。

石製品

70 茶臼　直径：18.7 ㎝。最大厚：11.3 ㎝。上臼。摺り目は９分画で、溝の断面はＶ字状であるが、使用によると考える磨滅が著しい。側面に柄を差し込む１辺 1.3 ㎝の四角形の孔が開けられている。（第 14 図－70、写真図版 20－１・２－70)。

【第１遺構面出土遺物】

貿易陶磁器

62 青磁碗　高台径：3.8 ㎝（復元)。器高：1.6 ㎝（残存）。厚さ：0.7～1.0 ㎝。色調：内・外面はオリーブ灰色（2.5GY 6/1)、断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。畳付部は釉をかき取っている。高台内は無釉。Ｇ期の 14 世紀初頭～15 世紀前半のものと思われる。溝２から出土。(第 14 図－62、写真図版 19－１－62)

【第２遺構面出土遺物】

瓦器

63 碗　高台径：4.4 ㎝（復元)。器高：1.1 ㎝（残存)。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/)、断面は灰白色（N 8/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。高台は極めて低く貼り付けている。見込み部に連結輪状の暗文を施している。大和型Ⅲ－Ｃ段階。13 世紀中頃～後半のものと思われる。Pit102 から出土。(第 14 図－63、写真図版 19－２－63)

64 碗　口径：14.0 ㎝（復元)。器高：3.1 ㎝（残存)。厚さ：0.2～0.3 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/)、断面は灰白色（N 8/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面のヘラミガキは不明。体部内面のヘラミガキは粗く施されている。大和型Ⅲ－Ｃ段階。13 世紀中頃～後半のものと思われる。溝 100 から出土。(第 14 図－64、写真図版 19－２－64)

土師器

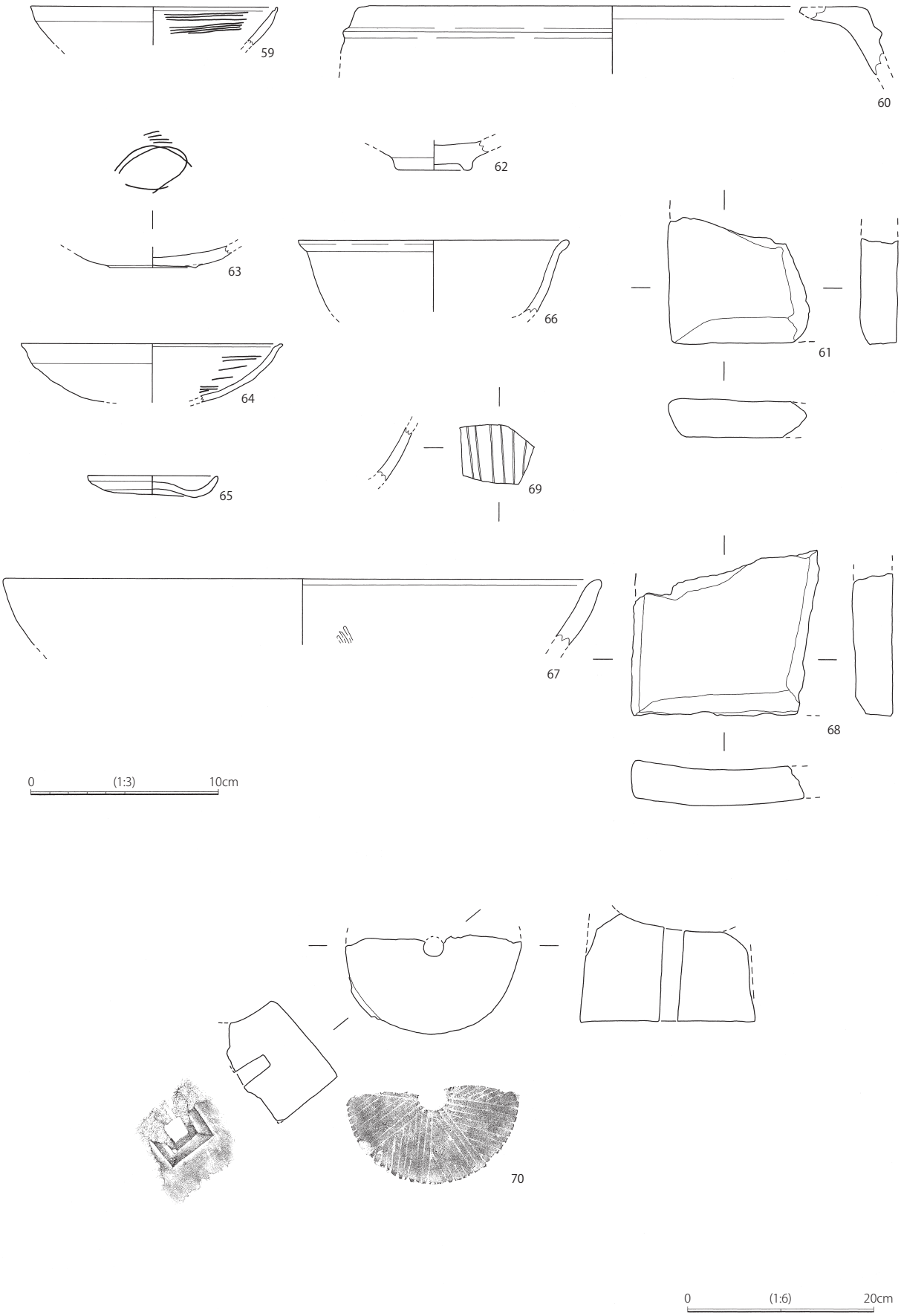
65 皿　口径：6.9 ㎝。器高：1.0 ㎝。厚さ：0.3～0.4 ㎝。色調：内・外面は浅黄橙色（10YR 8/4)。胎土：やや密。直径１㎜以下の白色砂粒・雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：8/9。口縁部は２度のヨコナデ調整により、端部は面取りを施している。15 世紀中頃のものと思われる。溝 101 から出土。（第 14 図－65、写真図版 19－２－65)

貿易陶磁器

66 青磁端反碗　口径：14.4 ㎝（復元)。器高：3.8 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.5 ㎝。色調：内・外面は明オリーブ灰色（2.5GY 7/1)、断面は灰白色（N7 /）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。Ｇ期の 14 世紀初頭～15 世紀前半のものと思われる。溝 101 から出土。(第 14 図－66 、写真図版 19－２－66)

瓦質土器

67 擂鉢　口径：32.0 ㎝（復元)。器高：3.5 ㎝（残存)。厚さ：0.5～0.9 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/)、断面は灰白色（N 8/)。胎土：やや密。直径１㎜の砂粒・石英を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁端部はヨコナデ調整により、やや外反する。摺り目は３本以上施されている。佐藤氏分類によるＤ型式で 15 世紀中頃のものと思われる。溝 101 から出土。(第 14 図－67、写真図版 19－２－67)



第14図　出土遺物（ＭＹ1994-２）

瓦

68 平瓦　長さ：8.8 ㎝（残存）。幅：8.9 ㎝（残存）。厚さ：2.0 ㎝。色調：凹・断面は灰白色（2.5Y 8/1）、凸面は灰色（N 5/）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の砂粒・石英・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。溝 101 から出土。（第 14 図－68、写真図版 19－２－68）

貿易陶磁器

69 青磁碗　長さ：3.1 ㎝（残存）。幅：13.9 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：内・外面はオリーブ灰色（2.5GY 6/1）、断面は灰白色（7.5Y 7/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面には線刻による蓮華文が施されている。Ｇ期の 14 世紀初頭～15 世紀前半のものと思われる。土坑 102 から出土。（第 14 図－69 、写真図版 19－２－69）

（村上）

第４章　調査のまとめ

第１節　調査のまとめ

今回報告した森山遺跡の５次にわたる調査では、遺跡内の状況を東西方向にトレンチ状に確認することができ、加えて 1994-2 次調査により遺跡北部の状況も判明し、縄文時代から近世にわたる多くの成果があった。以下、遺構・遺物の時期ごとにまとめを行っていきたい。

縄文時代　1994-1 次調査で第３遺構面下の天野川によるとみられる堆積層からこの時期の遺物がまとまって出土した。土器の型式が判別できたものは宮滝式と滋賀里式のものであり、縄文時代後期後葉から晩期前半を中心とした時期のものであった。また石器の中では旧石器時代末から縄文時代草創期の資料である有茎尖頭器（有舌尖頭器）の出土があり、注目できる。森山遺跡の周辺では、田原団地建設に伴う田原遺跡の発掘調査で縄文時代早期の集落を検出したほか（野島・櫻井 1980）、天野川の改修工事に伴い調査した八ノ坪遺跡・田原城跡でこれらの時期の遺物が出土しており（村上 2001、青柳 1999）、流域の上流に縄文時代の集落遺跡の存在が想定できるだろう。今後の調査で発見できることを期待したい。

古墳時代　1992-1 次調査および 1993-1 次調査でこの時期の資料が天野川によるとみられる堆積層からまとまって出土している。出土資料には完形に近いものが多く含まれており、付近に集落が存在したとみられる。田原盆地の発展を考えるうえで重要資料といえるだろう。籠目土器の出土は市内では管見に及ばず、大阪府下でも茨木市溝咋遺跡、八尾市亀井遺跡、藤井寺市国府遺跡などの例が数えられるに過ぎない（鐘方・角南 1998、角南 1999）。この種の土器製作技法の広がりを考えるうえで新たな資料といえる。また、出土資料には布留式後半とみられるものが含まれ、清滝峠を越えた大阪平野側の峠道筋にあたる上清滝遺跡で出土したものと同時期の可能性がある（村上・實盛 2017）。大阪平野と奈良盆地を結ぶ清滝街道の前身となるルートが、早くから存在した可能性を想起させる資料といえるだろう。

奈良時代　1992-1 次調査において No. 20 地区からこの時期の須恵器壺が完形に近い形で出土している。このことは、周辺においてこの時期に顕著な人間活動があり、それとのかかわりで祭祀等の理由によりこの資料が天野川に遺棄された可能性があることを示すとみる。ここで注目したいのは、歴史的環境の項で述べた田原鋳銭司の存在である。田原鋳銭司は、奈良市東部の田原地域とする説もあるが（岩橋 1969）、四條畷市および生駒市にまたがる田原地区に所在したとされる（栄原 1972、1993、中村 1972、仁藤 2018）。『続日本紀』神護景雲元年（767）十二月乙酉条と、同神護景雲三年（769）三月戊寅条に「田原鋳銭長官」の任官記事がみえ、平城宮跡第 133 次調査では宮の南面西門にあたる位置の調査で二条大路北側溝にあたる SD1250 から「田原銭五千文」の付札が出土した（奈良国立文化財研究所 1982）。存続期間には諸説あるが、これらの資料に裏付けられるように奈良時代に銭貨の製造を担っていた。関連遺物の出土がないため断定するには早計であるが、奈良時代の資料については鋳銭司の存在とのかかわりを考慮に入れておくべきであろう。今後も調査を継続し、鋳銭司の存在を裏付ける資料の発見に努めたい。

中世～近世　一連の調査で最も多く検出した遺構・遺物はこの時期のものである。1991-1 次および 1994-1 次調査の結果から、大阪府の 1992 年度調査（奥編 1993）とあわせ、遺跡の東半においては中世～近世の耕作遺構が良好に遺存していることが判明した。1991-1 次および 1994-1 次調査の第１遺構面では竹材を用いた暗渠排水溝を検出しており、これは大阪府 1992 年度調査でも第１遺構面で検出されたものである。これらのことから、この段階の水田は湿田であったことが確認できた。遺跡東半においてはこのような痕跡を確認していないことから、湿田であったのは遺跡東半の、特に天野川に近い区域であると判断できる。また、1994-1 次調査第２遺構面では多数の牛と思われる動物や人の足跡を検出し、水田面と思われる。これは、大阪府 1992 年度調査の第２遺構面や第３遺構面と同様の状況であり、標高も一致するため、対応する遺構面とみられる。遺構面は 1994-1 次と大阪府 1992 年度の両調査の結果から近世段階のものであり、近世における水田利用の状況を考古学的に示す資料といえるだろう。

一方、1994-2 次調査では中世段階の 15 世紀中ごろまで集落として利用されていた箇所が、それよりのちに耕作地として利用されるようになる状況を確認した。調査地区は遺跡の北端の高所部縁辺で、古堤街道沿いにあたり、現森山集落の端近くに位置する。集落関係の遺構は調査地区の中でも南半に多く存在しており、調査地区のすぐ南には古堤街道が通る。これらの遺構は、この街道が中世段階から存在し、それとのかかわりでこの場所に人間活動があったことを示しているのであろう。中世集落の存在は、現森山集落への人の居住が少なくとも中世段階から始まる可能性を示していると考える。調査地区の北 200mの位置には、平安時代 10 世紀前半の制作と想定されている薬師如来立像（融通念仏宗正傳寺蔵、市指定有形文化財、四條畷市史編さん委員会編 2016）が元来所在していた真言宗森福寺の跡がある。森福寺は、京都御室仁和寺菩提院の末寺で、天文二年（1534）の古文書にも記述がある（山口編 1972）。この平安期の古仏の存在から、寺の創建が平安時代にさかのぼる可能性が考えられており、こういった寺院の存在から、この地に人の居住が行われ、森山遺跡にも中世の人の居住跡が残された可能性があるだろう。

このように、森山遺跡の５次にわたる調査では、遺跡内の状況を東西方向にトレンチ状に確認することができ、中～近世の耕作地の状況の確認、旧天野川の氾濫による堆積状況の層位的確認、堆積内の出土遺物による、縄文時代、古墳時代、奈良時代における周辺集落の想定などの成果があった。加えて 1994-2 次調査により遺跡北部の状況も判明し、現森山集落への人の居住が少なくとも中世段階までさかのぼる可能性があること、その段階にはすでに古堤街道が存在していた可能性があること、中～近世にかけてのある段階で調査地区について集落から耕作地へと土地利用の変更が行われていることが判明した。田原地区における広範な遺跡調査事例は貴重であり、この地域の発展を考えるうえで、新たな資料を提供したといえるだろう。今後も調査を継続し、この地域の歴史のさらなる解明に努めていきたい。

（實盛）

参考文献

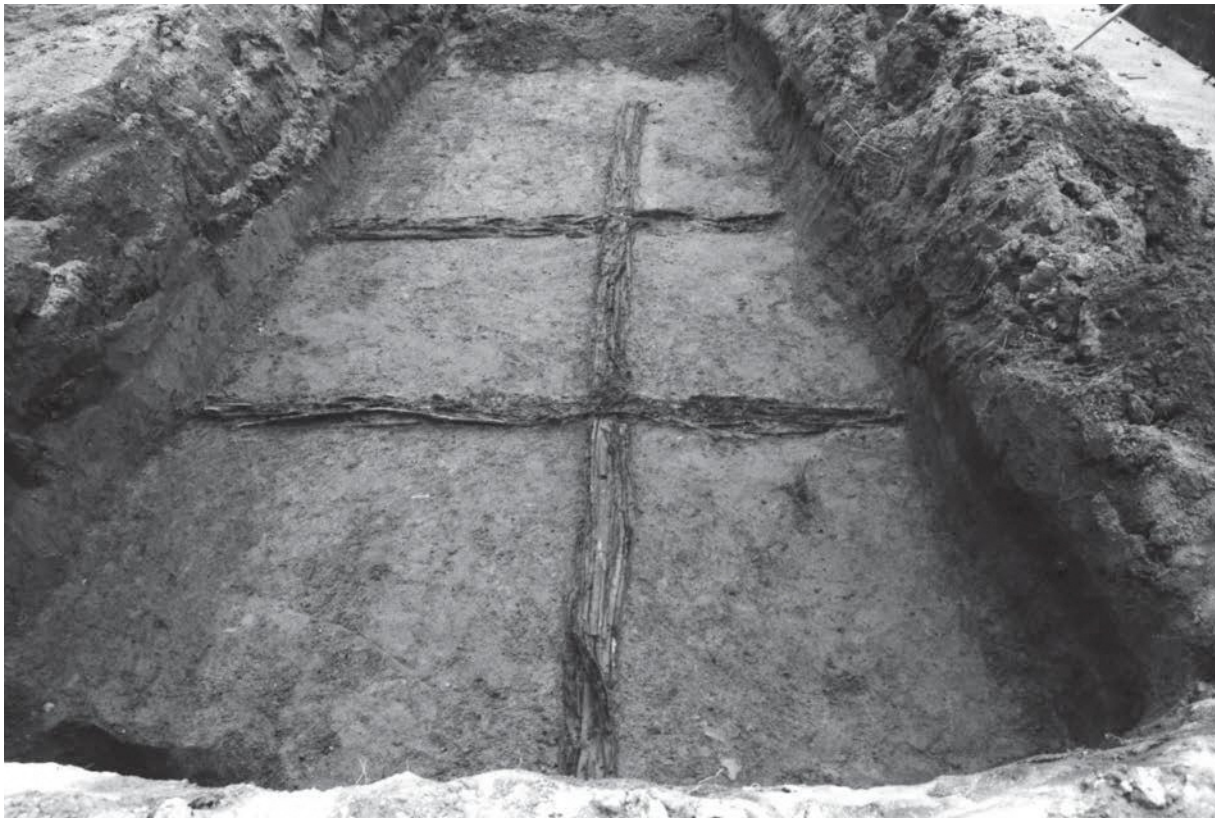
青柳泰介 1999「生駒市田原城跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1998 年度第２分冊、奈良県立橿原考古学研究所。
岩橋小彌太 1969『上代食貨制度の研究』第２集、吉川弘文館。
大阪府教育委員会編 1989『奈良街道』歴史の道調査報告第四集、大阪府教育委員会。
奥　和之編 1993『森山遺跡発掘調査概要』Ⅰ、大阪府教育委員会。
鐘方正樹・角南聡一郎 1998「籠目土器と笊形土製品」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1997、奈良市教育委員会。
黒田　淳 1989「飯盛山城跡の調査」『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』1988 年度、大東市教育委員会。
黒田　淳 2013『飯盛山城遺跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
古代の土器研究会編 1992『都城の土器集成』古代の土器研究会。
古代の土器研究会編 1993『都城の土器集成』Ⅱ、古代の土器研究会。
栄原永遠男 1972「鋳銭司の変遷とその立地」『古代を考える』10 号、古代を考える会。
栄原永遠男 1993『日本古代銭貨流通史の研究』塙書房。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2006『こども歴史　わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2010『歴史とみどりのまち　ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市史編さん委員会編 2016『四條畷市史』第５巻考古編、四條畷市。
實盛良彦 2013「飯盛山城をめぐる周辺の城跡」『大阪春秋』149 号、新風書房。
角南聡一郎 1999「弥生～古墳時代の籠目・籠形土器」『香川考古』第７号、香川考古刊行会。
大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2013『飯盛城跡縄張測量図』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店。
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社。
中井　均 1981「田原城」『日本城郭大系』第 12 巻、新人物往来社。
中村一紀 1972「鋳銭司の所在地について」『書陵部紀要』24 号、宮内庁書陵部。
中村　浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
奈良国立文化財研究所 1982『平城宮発掘調査出土木簡概報』15、奈良国立文化財研究所。
仁藤敦史 2018「官制からみた銭貨鋳造官司の変遷について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 210 集、国立歴史民俗博物館。
野島　稔・櫻井敬夫 1980『田原遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1981『田原城址・田原遺跡発掘調査概要』Ⅱ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1986『田原城址』Ⅵ、四條畷市教育委員会。
原田昌則・尾崎良史 2014『考古資料からみる八尾の歴史』公益財団法人八尾市文化財調査研究会。
平尾兵吾 1931『北河内郡史蹟史話』北河内郡教育会（1973 年増補再刊）。
宮崎泰史・藤永正明編 2006『年代のものさし』大阪府立近つ飛鳥博物館。
村上　始1999『寺口遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
村上　始2001『八ノ坪遺跡・田原城跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2012「天正九年銘『礼幡墓碑』」『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2011『清滝街道発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦編 2013『飯盛山城跡測量調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2017『上清滝遺跡・清滝街道発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
山口　博編 1972『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。
山口　博 1979『四條畷市史』第２巻、四條畷市役所。
山口　博 1990『四條畷市史』第４巻、四條畷市役所。
李　聖子編 2020『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。

写 真 図 版 1

1．森山遺跡　遠景（北西から・昭和62年頃）

2．森山遺跡　調査前全景（東から・平成３年）

写 真 図 版 2



1．MY1991－1　排水施設検出状況（南から）

2．MY1991－2　排水施設

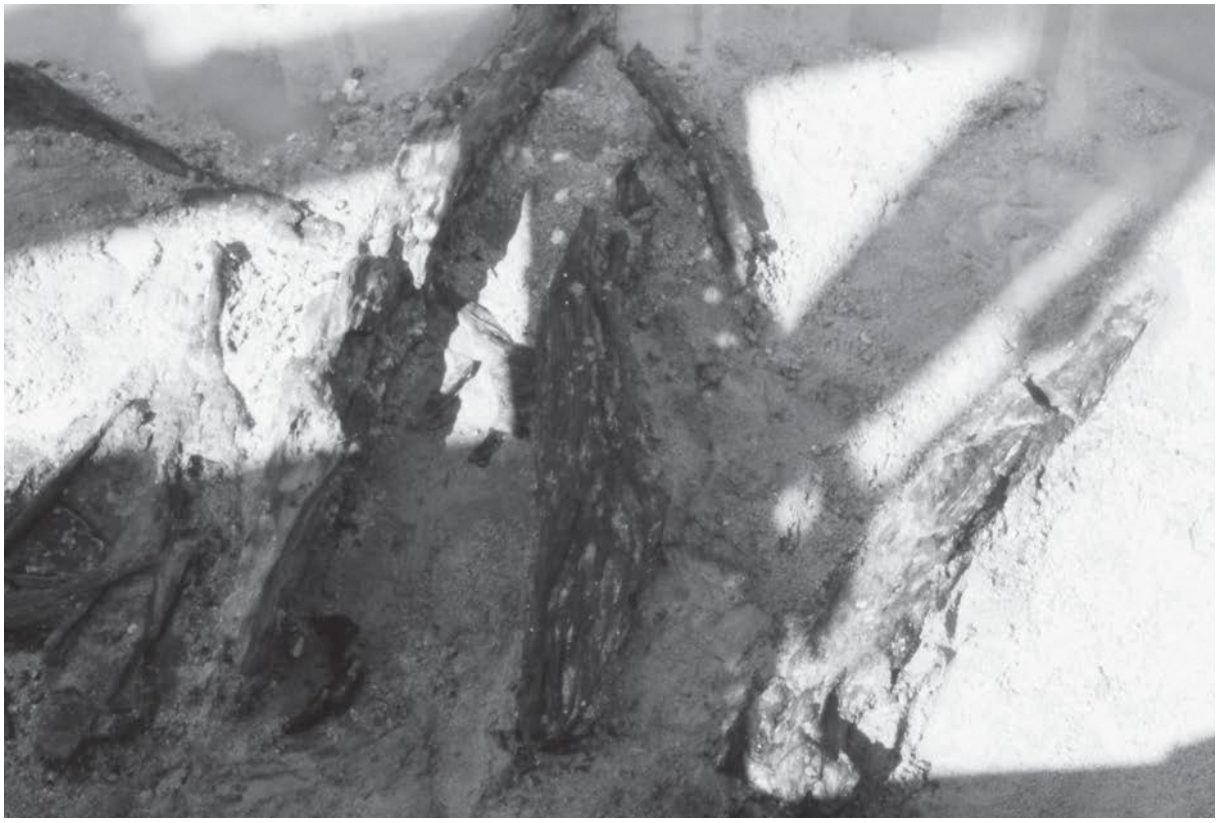
写 真 図 版 3

1．MY1991－1　調査地区西壁断面（南東から）

2．MY1991－1　完掘全景（北から）

写 真 図 版 4

1．MY1993－1　遺構面検出状況（西から）



2．MY1993－2　木質検出状況（南から）

写 真 図 版 5

1．MY1993－1　遺物出土状況（北から）

2．MY1993－1　調査地区南壁断面

写 真 図 版 6

1．MY1993－1　調査地区南壁断面（南東から）

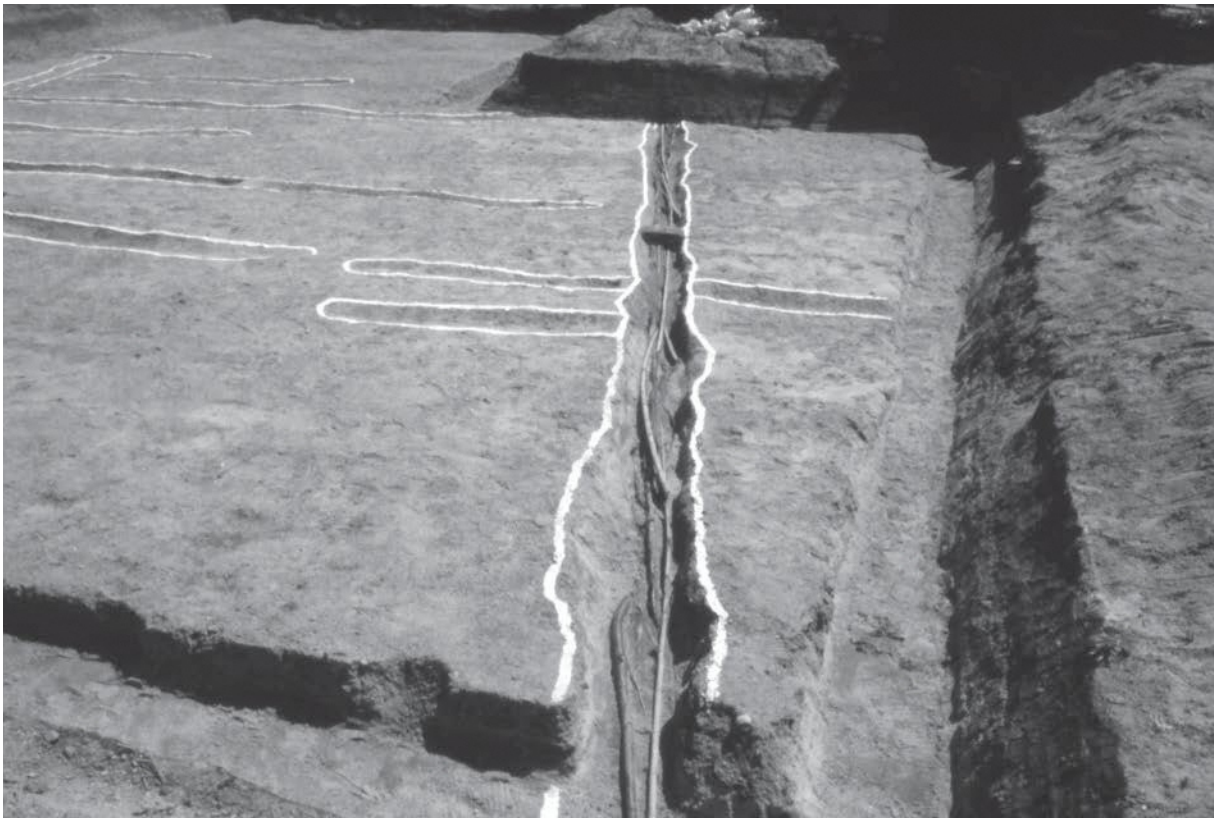
2．MY1993－1　完掘全景（東から）

写 真 図 版 7

1．MY1994－1　調査前全景（東から）

2．MY1994－1　第1遺構面全景（北東から）

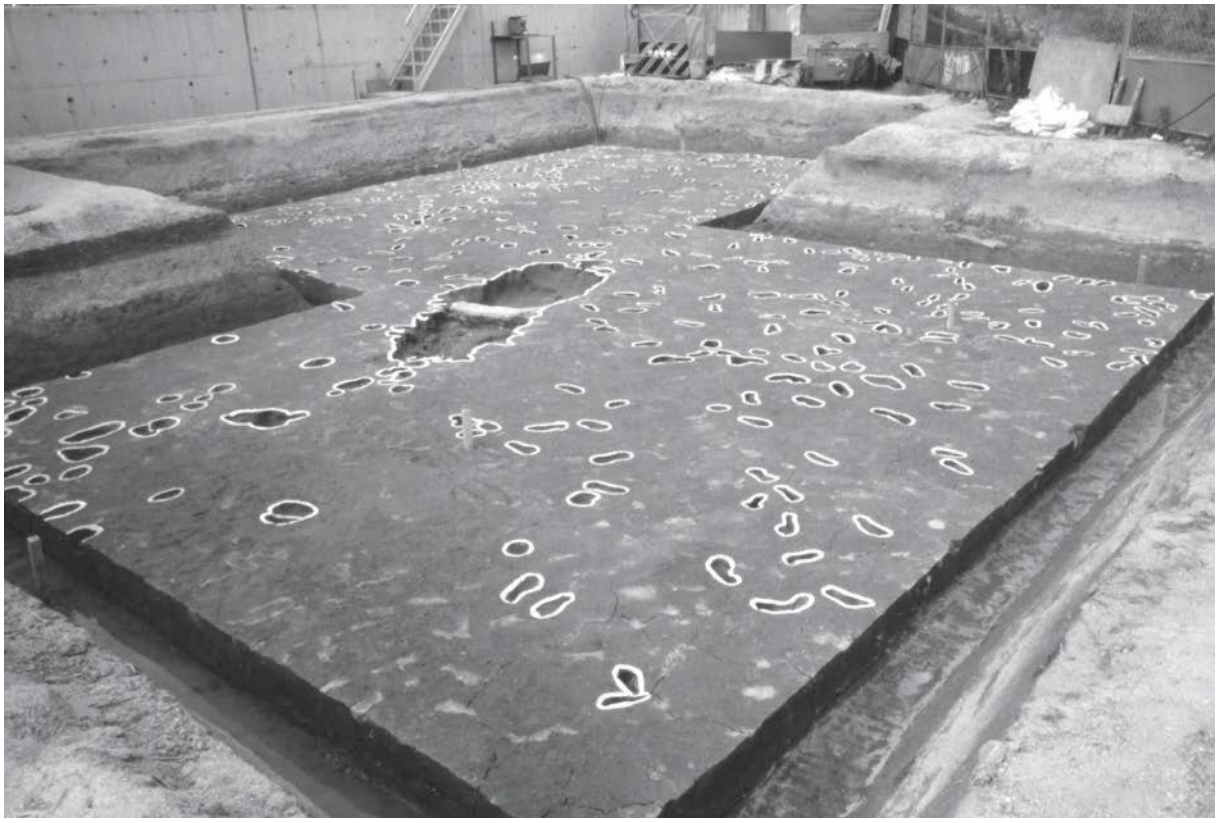
写 真 図 版 8



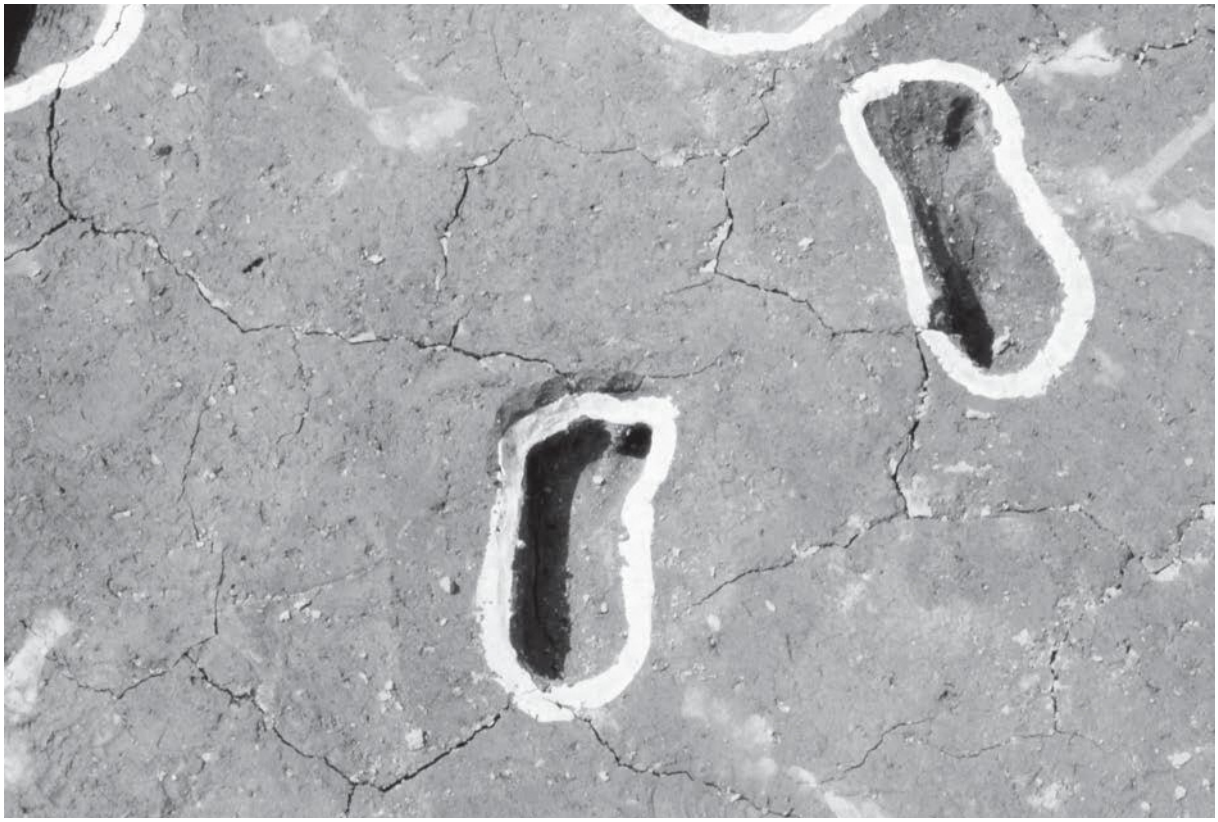
1．MY1994－1　第1遺構面　溝1（西から）

2．MY1994－1　第2遺構面検出状況（西から）

写 真 図 版 9



1．MY1994－1　第２遺構面完掘全景（南西から）



2．MY1994－1　第２遺構面　足跡

写 真 図 版 １０

１．ＭＹ1994－１　第３遺構面全景（西から）

２．ＭＹ1994－１　下層確認完掘全景（西から）

写 真 図 版 １１

１．ＭＹ1994－２　調査状況（東から）

２．ＭＹ1994－２　第１遺構面完掘状況（東から）

写 真 図 版 １２

１．ＭＹ1994－２　第２遺構面完掘状況（東から）

２．ＭＹ1994－２　第２遺構面完掘状況（南から）

写 真 図 版 １３

１．ＭＹ1994－２　第２遺構面完掘状況（東から）

２．ＭＹ1994－２　第２遺構面　土坑102（北から）

写 真 図 版 １４

１．ＭＹ1992－１　出土遺物（土器）

２．ＭＹ1992－１　出土遺物（金属器・石器）

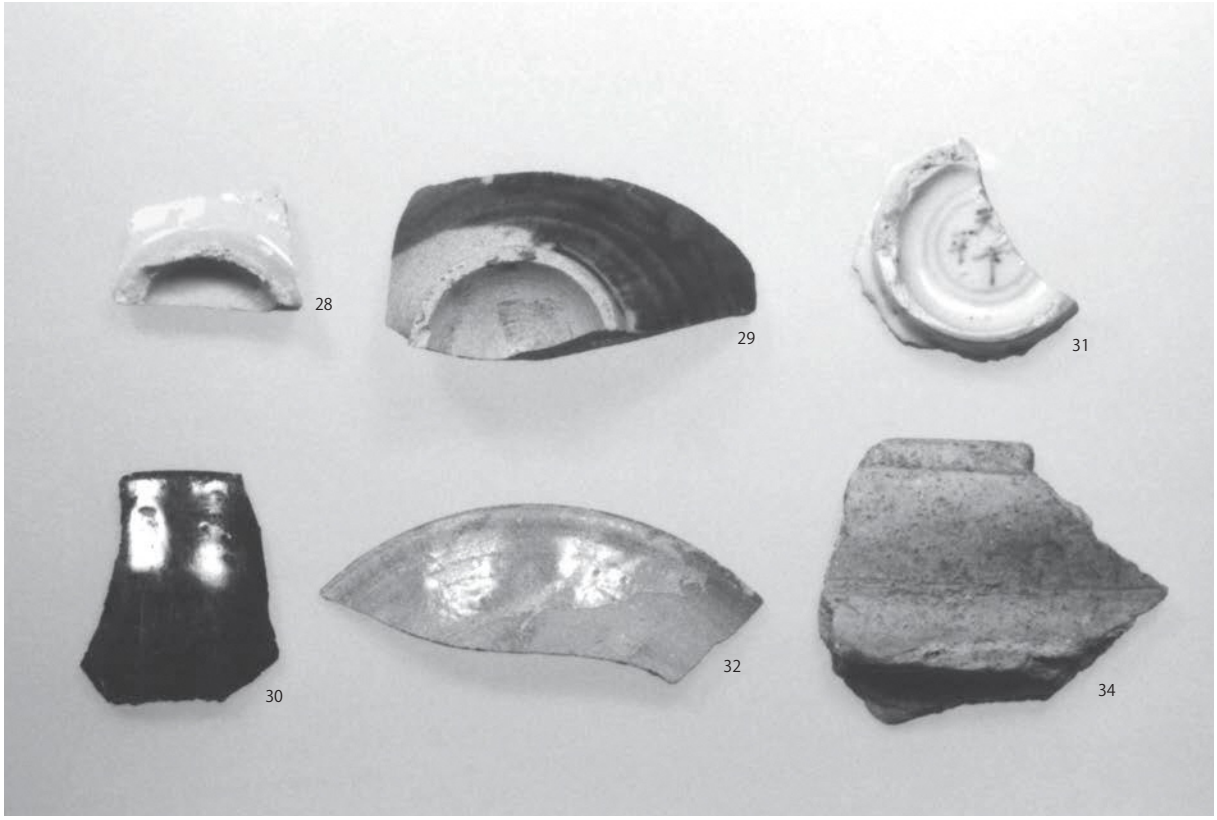
写 真 図 版 １５

１．ＭＹ1993－１　出土遺物（須恵器）

２．ＭＹ1993－１　出土遺物（土師器）

写 真 図 版 １６

１．ＭＹ１９９３－１　出土遺物（籠目土器・臼玉）



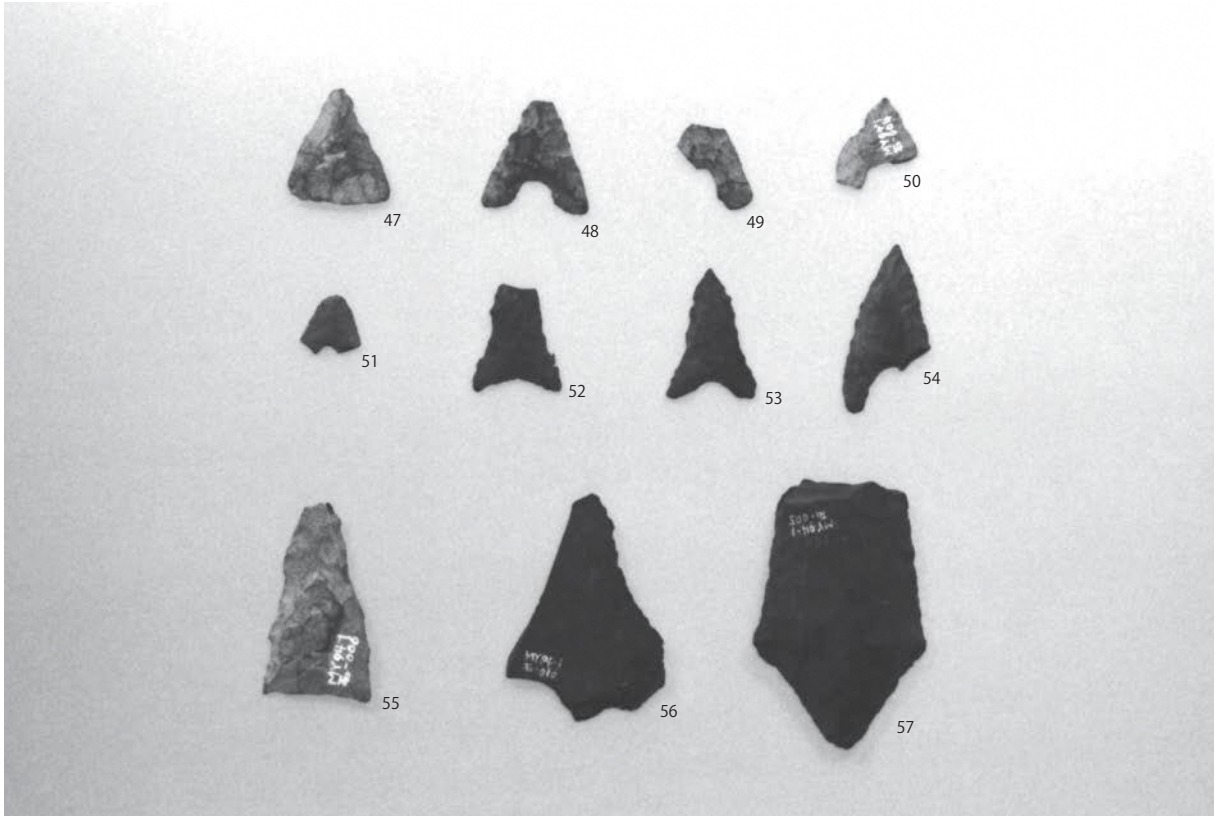
２．ＭＹ１９９４－１　出土遺物（陶磁器）

写 真 図 版 １７

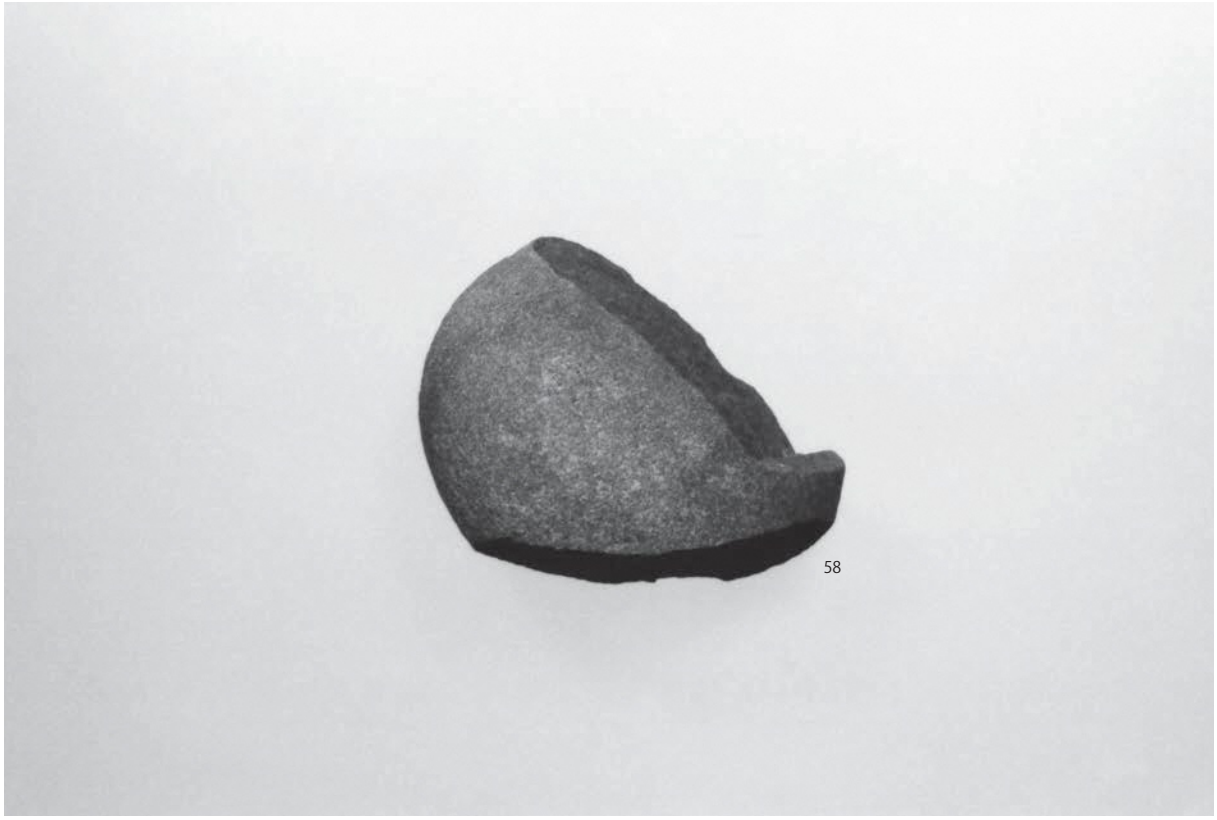
１．ＭＹ1994－１　出土遺物（縄文土器）

２．ＭＹ1994－１　出土遺物（縄文土器）

写 真 図 版 18



1．MY1994－1　出土遺物（打製石器）



2．MY1994－1　出土遺物昌

写 真 図 版 １９

１．ＭＹ1994－２　出土遺物（第１遺構面）

２．ＭＹ1994－２　出土遺物（第２遺構面）

写 真 図 版 ２０

１．ＭＹ1994－２　出土遺物（茶臼）

２．ＭＹ1994－２　出土遺物（茶臼）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しじょうなわてしぶんかざいちょうさねんぽう
書 名	四條畷市文化財調査年報
巻 次	第７号
副 書 名	森山遺跡
シ リ ー ズ 名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第 59 集
編 著 者 名	村上　始・實盛良彦
編 集 機 関	四條畷市教育委員会
所 在 地	〒575-8501　大阪府四條畷市中野本町１番１号
発 行 日	2020（令和２）年３月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
もりやまいせき 森山遺跡 （MY1991-1・1992-1・1993-1・1994-1・1994-2）	しじょうなわてし おおあざかみたわら 四條畷市 大字上田原	272299	34° 43′ 21″	135° 42′ 06″	平成３年４月 18 日～25 日 平成４年 12 月 11 日～平成５年２月 25 日 平成５年 10 月５日～28 日 平成６年５月 17 日～７月８日 平成６年７月４日～８日	29 ㎡ 429 ㎡ 76 ㎡ 140 ㎡ 252 ㎡	店舗付き住宅建設、汚水幹線築造、ポンプ場建設、個人住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
森山遺跡 （MY1991-1・1992-1・1993-1・1994-1・1994-2）	集落跡	縄文、 古墳、 奈良、 中世、 近世	耕作地、 旧河川、 土坑、溝、 Pit	縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、金属製品、石器、石製品	天野川の氾濫による堆積状況を層位的に確認

四條畷市文化財調査報告　第 59 集

四條畷市文化財調査年報

第７号

森山遺跡

令和２年（2020）３月 31 日発行

編　集　四條畷市教育委員会

発　行　四條畷市教育委員会

大阪府四條畷市中野本町１番１号

印　刷　株式会社　共英印刷所